

關西九館所藏 中國書畫錄

目次

凡例					
前言					
原色圖版					1 頁
單色圖版					9 頁
本文					77 頁
	(作品名)	(作者)	(時代)	(所藏)	(※圖版)
一	行書李白仙詩	蘇軾	北宋	大阪市立美術館	79 頁
二	草書李太白憶舊遊詩	黃庭堅	北宋	藤井齊成會友鄰館	95 頁
三	草書四帖	米芾	北宋	大阪市立美術館	106 頁
四	論語集註草稿	朱熹	南宋	京都國立博物館	113 頁
五	論語集註草稿殘稿	朱熹	南宋	京都國立博物館	122 頁
六	秋野牧牛圖	傅閻次平	南宋	泉屋博古館	128 頁
七	雪中歸牧圖	李迪	南宋	大和文華館	132 頁
八	蜀葵遊猫圖・萱草遊狗圖	傅毛益	南宋	大和文華館	135 頁
九	竹燕圖	馬遠	南宋	大和文華館	136 頁
十	名賢寶繪冊	夏圭 他	南宋	大阪市立美術館	137 頁
十一	遠浦歸帆圖	牧谿	南宋	京都國立博物館	143 頁
	『關西九館所藏 中國書畫錄』	正誤表			145 頁
	『關西九館所藏 中國書畫錄』	正誤表			146 頁
	擔當者一覽				

※關西中國書畫コレクション研究会公式サイト公開のPDF版では都合により圖版は掲載しておりません。二〇一五年三月二十五日發行の印刷・製本版を御参照ください。

凡例

- 一、本書は、關西九館（關西中國書畫コレクション研究會參加館：和泉市久保惣記念美術館・大阪市立美術館・觀峰館・京都國立博物館・黒川古文化研究所・泉屋博古館・澄懷堂美術館・藤井齊成會有鄰館・大和文華館）が所藏する書畫のうち、『中國書畫探訪』（二玄社、二〇一一年）掲載作品を中心に、落款、題跋、鑑藏印、箱書などの文字資料を圖版・釋文・注解によって紹介することを目的に編纂した。
- 一、本巻には宋時代の計十一件を収録した。
- 一、各作品の記載項目は、箱書、裂、題簽、款記、跋、鑑藏印、付屬文書の順を原則としたが、作品の状況と参照の便を考慮して適宜變更した箇所もある。
- 一、寸法の単位はセンチメートルで、畫面の縦×横で表わした。
- 一、釋文には、句點を施した。また、作品に書された割注については（ ）を、押印箇所などの位置を示す場合には〔 〕を用いた。
- 一、判讀出来ない文字は、「右半缺」や□□などと適宜表記した。
- 一、釋文中の年紀、地名、人名、書名や鑑藏印の押印者など、内容の理解に資する事項には注を付けた。また、傳來の過程や研究史に關する情報・知見について備考欄で解説した。
- 一、著録欄には、當該作品あるいはその可能性のある作品が収録される文獻を挙げた。
- 一、参考文献欄には、その作品を研究する上で基礎となる論文、圖録等を挙げた。

前言

關西中國書畫コレクション研究會として、參加館が收藏・保管する中國書畫の共同調査を開始したのは二〇一〇年四月のことである。爾後ほぼ月に一度の割合で研究會を開催し、既に五年に垂んとする。この間、調査は犬養木堂記念館・東京國立博物館・臺東區立書道博物館・笠岡市立竹喬美術館「明清の繪畫 山岡コレクション」展・群馬縣立近代美術館、さらには臺北の國立故宮博物院・國立中央研究院・鴻禧美術館・林家花園に及んだ。

二〇一一年の九館連携展「關西中國書畫コレクション展」と國際シンポジウム以後、研究成果は、各館での中國書畫関連の展覽會のほか、次のような機會を通して一般に公開してきた。

- ・シンポジウム「コレクター橋本末吉が拓いた地平」(大阪市立美術館特別陳列「橋本コレクション中國書畫」、二〇一二年七月)
- ・調査報告會「臺北 國立故宮博物院的コレクションを中心に」(澄懷堂美術館「臥遊」展、二〇一三年十二月)
- ・三館(黒川古文化研究所・泉屋博古館・大和文華館)連携「松・竹・梅」展公開研究會(大和文華館「竹の美」展、二〇一四年三月)
- ・公開研究會「富岡鐵齋の中國趣味」(大和文華館特別企画展「富岡鐵齋と近代日本の中國趣味」、二〇一四年十月)

本報告書は二〇一三年三月に刊行した『關西九館所藏 中國書畫録』を繼ぐ第二冊で、兩宋の書畫十一件の資料を纏めている。御高覽のうえ、御斧正賜れば幸甚である。

末尾になりましたが、本會の研究の趣旨に深い御理解を頂き、活動と報告書の作成にあたって貴重な助成を賜りました、公益財団法人三菱財團様に衷心より御禮申し上げます。

二〇一五年三月

本
文

一行書李白仙詩 蘇軾筆

重要文化財

大阪市立美術館

北宋·元祐八年（一〇九三）

紙本墨書

三四·〇×一一·一

內箱蓋表「圖 1.1」

蘇文忠公書太白仙詩卷（長尾甲）^①

外題簽「圖 1.2」

宋蘇文忠公書李太白仙詩真蹟

端溪蘇桂簪祕藏、光緒甲辰季冬記^③

題簽（前隔水）「圖 1.3、1.3.1」

蘇文忠書太白仙詩真蹟

神品上上、儼齋〔祕〕藏^④

「訥菴」（白文長方印、劉恕^⑤）、「樂山堂」（朱文長方印）

「圖 1.3.2」

本文

〔第一紙〕「圖 1.3、原色圖版 1」

朝披夢澤雲、笠釣清茫茫、尋絲得雙鯉、內有三元章、篆字若丹

蛇、逸勢如飛翔、還家問天老、奧義不可量、金刀割青素、靈文爛煌煌、嚙服十二環、奄見仙人房、莫跨紫鱗去、海氣侵肌涼、龍子善變化、化作梅花粧、贈我纍纍珠、靡靡明月光、勸我穿絳纓、繫作裙閒璫、挹子以攜去、談笑聞遺香

〔第二紙〕

人生燭上華、光滅巧妍盡、春風繞樹頭、日與化工進、只知雨露貧、不聞零落近、我昔飛骨時、慘見當塗墳、青松靄朝霞、縹眇山下村、既死明月魄、無復玻璃魂、念此一脫灑、長嘯登崑崙、醉着鸞皇衣、星斗俯可捫

元祐八年七月十日、丹元復傳此二詩^⑦

鑑藏印

〔第一紙首部〕「圖 1.3.3、原色圖版 1」

「劉氏寒碧莊印」（朱文長方印、劉恕）

「明窗一日百回看」（朱文長方印、程棫義）

「松雪齋」（墨文長方印、趙孟頫^⑧）

「心柏珍祕」（朱文長方印、程棫義^⑨）

「瓶廬」（朱文長方印、高士奇）

「王鴻緒印」（朱文方印、王鴻緒）

「毛氏子晉」（朱文方印、毛晉^⑩）

「〔右半缺〕□□」(白文方印)

「〔左上殘存〕□□」(白文印)

「盧琛私印」(朱文長方印、盧琛⁽¹⁾)

「增江盧氏海上山樓祕藏之寶」(朱文長方印、盧氏)

「古齋真賞」(朱文方印)

「中山父印」(白文方印、喬箕成⁽¹⁾)

「希世之珍」(朱文方印)

〔第一紙尾部〕「圖 1.3.4」

「增江盧子忠」(朱文方印、盧子忠⁽¹⁾)

「梅屋審定」(白文方印、盧梅屋⁽¹⁾)

「傳家之珍」(白文方印)

「寒碧主人印」(朱文方印、劉恕)

「蘇元瑞印」(白文方印、蘇元瑞⁽¹⁾)

「一字行之」(朱文方印、劉恕)

「劉蓉峰印」(白文方印、劉恕)

「楨義」(朱文長方印、程楨義)

「程心柏藏」(朱文方印、程楨義)

「程氏寶玩」(朱文方印、程楨義)

「王鴻緒印」(朱文方印、王鴻緒)

「儼齋」(朱文方印、王鴻緒)

「千里共」(左半不明)「(朱文長方印)

〔騎縫〕「圖 1.3.4」

「梅屋祕藏」(朱文方印、盧梅屋)

「心柏珍祕」(朱文長方印、程楨義)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「江邨祕藏」(朱文長方印、高士奇)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「喬氏私印」(白文方印、喬箕成)

「笑狂」(白文方印)

「謙」(朱文方印)

「儼齋祕玩」(朱文方印、王鴻緒)

「樊安漢」(白文方印)

□□□□(白文方印)

〔第二紙首部〕「圖 1.3.5」

「子中眼福」(白文方印、盧子中)

「獻南真賞」(白文方印、盧獻南⁽¹⁾)

「楨義鑑定」(朱文方印、程楨義)

「廣平家藏」(朱文方印)

「行止清玩之印」(朱文方印、劉恕)

- 〔第二紙尾部〕「圖 1.3.6」
- 〔端人蘇元瑞鑑藏之章〕（朱文長方印、蘇元瑞）
- 〔增江盧獻南家世寶〕（朱文方印、盧獻南）
- 〔子中鑑定〕（朱文長方印、盧子中）
- 〔希世之寶〕（朱文方印）
- 〔劉恕〕（朱文方印、劉恕）
- 〔寒碧主人〕（白文方印、劉恕）
- 〔韓崇印信〕（朱文方印、韓崇）
- 〔喬氏圖書〕（朱文方印、喬箕成）
- 〔東吳毛氏圖書〕（朱文長方印、毛晉）
- 〔楨義祕藏〕（朱文長方印、程楨義）
- 〔傳經堂鑑賞〕（白文長方印、劉恕）
- 〔含青樓書畫記〕（朱文長方印、劉恕）
- 〔子孫永保〕（朱文方印、王鴻緒）
- 〔雲閒王鴻緒鑑定印〕（朱文長方印、王鴻緒）
- 〔高士奇圖書記〕（朱文方印、高士奇）
- 〔笑狂（左半缺）〕（白文方印）
- 〔謙〕（朱文方印）
- 〔訥菴祕玩〕（朱文長方印、劉恕）
- 〔問不知齋〕（墨文方印）
- 〔省〕（白文方印、劉恕）

〔右上殘存〕（白文方印、「笑狂」と同印か）

蔡松年跋「圖 1.4.1.5」

老坡平生多與異人遇、此詩帖云、傳於丹元、丹元者、道人姚安世自號也、先生將赴定武、前兩月與姚相會於京師、出南嶽典寶東華李真人像及所作二詩、言近有人於海上見之、蓋太白云、雖事涉荒怪、然決非火食肉人所能贗作、嗟夫、二公未遺世時、世皆以謫仙目之、今當相從於閩風弱水之上、醉笑調歌、靈音相答、皆九霞空洞中語、衆不可、蓋後復有神游八表者、傳誦而來、洗空萬古俗氣、吾老矣、尙或見之、正隆四年閏六月、西山蔡松年題

鑑藏印

- 〔蔡松年跋首部〕「圖 1.4」
- 〔蓉峰〕（朱文方印、劉恕）「圖 1.4.1」
- 〔曾在寒碧莊主人處〕（白文長方印、劉恕）
- 〔右半缺〕笑狂（白文印）「圖 1.4.2」
- 〔心柏珍祕〕（朱文長方印、程楨義）
- 〔毛〕「晉」（朱文連印、毛晉）
- 〔竹窗〕（朱文長方印、高士奇）
- 〔私印〕（白文方印）「圖 1.4.1」

「兒？湯？私印」(白文方印)

「蘇成」(白文方印)

「周午(中)之印」(白文方印)

「楊受？」(白文方印、楊受_{2,3})

「楊越人」(白文方印、楊受？)〔圖 1·4·2〕

「臣廣國印」(白文方印)

「遺？德？□業？」(朱文方印)

「儼齋」(朱文方印、王鴻緒)

「增江盧子忠」(朱文方印、盧子忠)

「羅浮梅道子」(朱文方印)

「祕玩書印」(朱文方印)

〔騎縫〕〔圖 1·5〕

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)

「喬氏私印」(白文方印、喬箕成)

「梅室祕寶」(朱文長方印)〔圖 1·5·1〕

「心柏珍祕」(朱文長方印、程楨義)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「儼齋祕玩」(朱文方印、王鴻緒)

〔蔡松年跋尾部〕〔圖 1·5〕1·6〕

「盧氏子中平生真賞」(白文方印、盧子中)〔圖 1·5·2〕

「希世之珍」(白文方印)

「盧氏夢晉齋所藏之寶」(朱文方印、盧氏)

「子孫永保」(朱文方印)

「端人蘇氏元瑞圖書記」(白文方印、蘇元瑞)

「楊昭私印」(白文方印、楊昭_{2,3})

「楊氏傳家」(白文方印、楊昭？)

「游戲繪事」(白文方印、楊昭？)

「□昭」(白文方印、楊昭？)〔圖 1·5·3〕

「仲曦」(朱文方印)

「昭」(白文方印、楊昭？)

「程楨義印」(白文方印、程楨義)

「心柏氏」(朱文方印、程楨義)

「寒碧」(白文長方印、劉恕)

「行之劉恕蓉峰氏書畫記」(白文長方印、劉恕)

「毛」〔晉〕(朱文連印、毛晉)〔圖 1·6·2〕

「汲古主人」(朱文方印、毛晉)

〔騎縫〕〔圖 1·6〕

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)〔圖 1·6·1〕

「盧梅屋寶藏印」(朱文長方印、盧梅屋)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「喬氏私印」(白文方印、喬箕成)

「儼齋祕玩」(朱文方印、王鴻緒)「圖 1.6.2」

「樊安漢」(白文方印)

「散憲」(白文方印)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「熊賀」(白文方印)

「黃寬私印」(白文方印)

施宜生跋「圖 1.6」

誦太白此語、則人閒無詩、觀東坡此筆、則人閒無字、今有丞相蔡衛公所題、則人閒無所啓其喙、縱復妄發、適爲滓穢清虛、此卷當有神物護持、自非夙緣留名十洲三島者、未易得見、矧擅有而藏之者、豈陸行人哉、二公仙去已久、衛公且謂、後有傳九霞空洞中語而來、僕敢言、蕭閑住世、今此身是、何謂尙或見之耶、
施宜生⁽²⁴⁾謹書

鑑藏印

「施宜生跋首部」「圖 1.6、1.6.2」

「羊城盧獻南書畫之印」(朱文方印、盧獻南)

「漱石書莊藏印」(白文方印、程楨義)

「程氏心柏審定」(朱文方印、程楨義)

「施宜生跋尾部」「圖 1.6」

「寒碧主人所好」(朱文方印、劉恕)

「騎縫」「圖 1.7」

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)

「心柏珍祕」(朱文長方印、程楨義)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「儼齋祕玩」(朱文方印、王鴻緒)

「喬氏私印」(白文方印、喬箕成)

「樊安漢」(白文方印)

「梅屋祕藏」(朱文方印、盧梅屋)

「散憲」(白文方印)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「熊賀」(白文方印)

「黃寬私印」(白文方印)

劉沂跋「圖 1.7」

孔子作春秋、游夏不能措一辭⁽²⁵⁾、此帖清奇超妙、蔡衛公首發明之、

施先生繼品題之、顧如晚進、安敢措辭於其後哉、姑記姓名、以見榮觀之幸焉、劉沂謹書

鑑藏印

- 〔劉沂跋尾部〕〔圖 1·7〕
- 〔獻南鑑賞〕（朱文方印、盧獻南）
- 〔精白傳家〕（朱文方印）
- 〔劉恕書畫記〕（白文方印、劉恕）
- 〔蓉峰鑑賞圖書〕（朱文方印、劉恕）
- 〔程漱石鑑賞章〕（朱文方印、程楨義）〔圖 1·7·1〕
- 〔騎縫〕〔圖 1·8〕
- 〔江邨祕藏〕（朱文方印、高士奇）
- 〔心柏珍祕〕（朱文長方印、程楨義）
- 〔梅屋祕藏〕（朱文方印、盧梅屋）
- 〔訥菴祕玩〕（朱文長方印、劉恕）
- 〔喬氏私印〕（白文方印、喬箕成）
- 〔儼齋祕玩〕（朱文方印、王鴻緒）
- 〔樊安漢〕（白文方印）
- 〔散憲〕（白文方印）〔圖 1·7·1〕
- 〔含青樓〕（白文方印、劉恕）

〔熊賀〕（白文方印）
〔黃寬私印〕（白文方印）

高衍跋〔圖 1·8〕

太白清奇出塵之詩、老泉飄逸絕倫之字、非衛公品題、無以發明、施老以謂、二公仙去已久、蕭閑今此身是、誠非虛語、正隆己卯立秋前一日、高衍題

鑑藏印

- 〔高衍跋尾部〕〔圖 1·8〕〔圖 1·9〕
- 〔程氏祕極〕（朱文方印、程楨義）
- 〔楨義鑑藏〕（朱文方印、程楨義）
- 〔蘇氏寶宋閣〕（朱文長方印、蘇元瑞？）〔圖 1·9〕
- 〔端谿蘇元瑞寶藏宋蘇文忠公書真蹟二卷〕（白文長方印、蘇元瑞）
- 〔寒碧主人〕（白文圓印、劉恕）
- 〔劉蓉峰印〕（朱文方印、劉恕）
- 〔騎縫〕〔圖 1·9〕
- 〔江邨祕藏〕（朱文方印、高士奇）
- 〔心柏珍祕〕（朱文長方印、程楨義）

「梅屋祕藏」(朱文方印、盧梅屋)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「喬氏私印」(白文方印、喬箕成)〔圖 1.9.1〕

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「儼齋祕玩」(朱文方印、王鴻緒)

「(印文不明)」

「樊安漢」(白文方印)

「散憲」(白文方印)

「熊賀」(白文方印)

「黃寬私印」(白文方印)

蔡珪跋〔圖 1.9〕

玉局傳東華之詩、蕭閑題玉局之字、三住老仙發揚之、金闕侍郎

祕藏之、雖至寶所在有物護持、終恐爲六丁持去、如珪輩薄福人、

或不得時見之也、此所以捧玩再四、遲遲其還、是月中休日、

蔡珪謹書

「楊昭私印」(白文方印、楊昭)

「寒碧主人」(白文方印、劉恕)

「蓉峰」(朱文方印、劉恕)

「子中父印」(朱文方印、盧子中)

「人生安得如汝壽」(白文長方印)

「華步」(白文長方印、劉恕)

「楨義」(朱文方印、程楨義)

「程心柏藏」(朱文方印、程楨義)

「程氏寶玩」(朱文方印、程楨義)

「子孫永保」(朱文方印、王鴻緒)

「雲閒王儼齋所藏記」(朱文長方印、王鴻緒)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「傳經堂鑑賞」(白文長方印、劉恕)

「含青樓書畫記」(朱文長方印、劉恕)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「江邨祕藏」(朱文方印、高士奇)

「高士奇圖書記」(朱文長方印、高士奇)

鑑藏印

「蔡珪跋尾部」〔圖 1.9〕

「楊昭寶玩」(白文方印、楊昭)

「傳之子孫」(白文方印、楊昭?)

張弼跋〔圖 1.10〕

「天趣軒」(朱文長方印)〔圖 1.10.2〕

此東坡書李太白詩、金相蔡松年跋之詳矣、正隆⁽³⁰⁾乃金主逆亮⁽³¹⁾年號、

施宜生卽程史所記奔金使宋、洩機而被戮者、松年而下、用筆皆稍似蘇者、當時程學行於南、蘇學行於北、金之尊蘇、與孔子竝、故習其作風、皆有類耳、宜生輩於松年、辭極推重、書必提頭、此當時諛佞之風也、然由此、亦可以觀其人、覘國之脈矣、松年與宋京卞同姓同時、又云西山、故觀者誤以爲宋人、非京卞鼠輩、卽季通諸大君子、故不敢輕議也、然其言之當、雖京卞輩、亦不以人廢言、松年雖略過稱、其所見以是爲的耳、何怪哉、鄉貢進士南海梁克載、得而珍藏之、吾三兒弘至、與之同舟來南安、因出觀之、遂書以復

大明成化十九年癸卯八月晦、華亭張弼在南安郡之喩風弄月臺書

「張弼」(朱文方印)、「東海居士」(朱文方印)

鑑藏印

〔張弼跋首部〕「圖 1·10·1」

(一印削去)

「廣平仲子」(白文方印)

「程氏寶玩」(朱文方印、程楨義)

「寒碧主人印」(朱文方印、劉恕)

〔騎縫〕「圖 1·12」

「心柏珍祕」(朱文長方印、程楨義)「圖 1·12·1」

「梅屋祕藏」(朱文方印、盧梅屋)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

〔張弼跋尾部〕「圖 1·12」

(一印削去)

「楨義珍賞」(朱文方印、程楨義)

「傳經堂鑑賞」(白文長方印、劉恕)

「含青樓書畫記」(朱文長方印、劉恕)

「含青樓」(白文方印、劉恕)

「華亭王氏珍賞」(朱文方印、王鴻緒)

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

高士奇跋「圖 1·13」

「瓶廬」(朱文長方印)、「高詹事」(白文方印)

蘇文忠公行書真蹟、惟寒食詩與此卷、流傳名重、筆墨蒼奇、紙色完好、然寒食詩、止黃文節一跋、此則金朝諸老所題凡五、多一時名輩、金人筆墨、世尤罕見、當與蘇公所書竝傳、按蔡松年字伯堅、仕金、由行臺尙書省令史、至尙書右丞相、加儀同三司、封衛國公、鎮陽別業、有蕭閒堂、自號蕭閒老人、謚文簡、當時樂府、推伯堅與吳彥高、號吳蔡體、有集行於世、其自序云、王

夷甫神情高秀、宅心物外、爲天下稱、自言少無宦情、使其雅詠元虛、不經世務、超然遂終其身、則亦何減嵇阮、而當衰世頹俗、力不可爲之、時不能遠引、高蹈顛危之、卒與晉俱爲千古名士之恨、讀此序則其生平可見、施宜生字明望、浦城人、宣和末、爲穎州教官、仕金至翰林學士、自號三住老人、其在穎州日、從趙德麟遊、頗得蘇門沾丐、劉沂史不載、味其跋語、亦蔡施同時人、高衍字穆仲、遼陽渤海人、敏而好學、自少有能賦名、同舍生欲試其才、使一日賦十題戲之、衍執筆怡然、未暮皆就、彬然可觀、年二十六登進士第、乞歸養、逾二年調溇陰丞、歷官尙書省令史、前後三爲吏部、事脩、舉人便之、大定五年爲宋生日使、中途以病告歸、蔡珪字正甫、松年長子、七歲賦菊詩、語意驚人、日授數千言、天德三年進士、擢第後、赴選調求、未見書讀之、其辯博爲天下第一、歷澄州軍事判官、三河簿、正隆三年銅禁行、官得三代以來鼎鐘彝器、以正甫博物且識古文奇字、辟爲類編官、後爲翰林修撰、同知制誥、改戶部員外郎、太常丞、朝廷稽古禮文之事、取其議論爲多、其續歐陽公集古錄六十卷、古器編三十卷、補南北史志書六十卷、水經補亡四十篇、晉陽志十二卷、今之傳世者、宋元人墨蹟尙可得、金人墨跡甚少、此不僅坡公書法高妙、諸跋字跡皆佳、故各書大略、後之覽者、當竝跋寶而藏之、康熙癸酉四月十日、天氣清和、檻前薔薇未謝、瓶頭芍藥尙存、煮惠山泉、試龍井茶、門無客至、思早夏勝殘春之句、深有會心、

敬跋坡公卷後、時居柘湖之瓶廬

江邨抱甕翁高士奇

「士奇」(朱文方印)、「高澹人」(白文方印)、「竹窗」(朱文長方印)

鑑藏印

〔高士奇跋尾部〕「圖 1.14」

〔盧氏梅屋珍玩〕(朱文方印、盧梅屋)

〔楨義之章〕(朱文方印、程楨義)

〔訥菴祕玩〕(朱文長方印、劉恕)

〔傳經堂鑑賞〕(白文長方印、劉恕)

〔含青樓書畫記〕(朱文長方印、劉恕)

〔騎縫〕「圖 1.14」

〔寒碧〕(朱文長方印、劉恕)

〔梅屋山人鑑賞〕(朱文方印、盧梅屋)

沈德潛跋「圖 1.15」

〔御題 學有本原〕(朱文橢圓印)

東坡詩文字跡、徽宗時、蔡京、蔡卞當國、欲盡焚滅之、因梁師

成先臣何罪一言而止、高宗朝御筆製序、詩文得以不滅、後內府

搜得一紙、價直萬錢、譚鎮以五萬錢易月林堂字榜額、珍于拱璧矣、金人非坡書不習、今觀仙詩二章後共五跋語、蔡松年·施宜生·蔡珪三跋、皆學蘇而得其形似者、宜生跋云、觀太白此詩、則人閒無詩、觀東坡此筆、則人閒無字、蓋傾倒之至、不待後人稱揚矣、予故不復贅論、至太白仙去後詩、此東坡遊戲三昧、直以謫仙自況也、松年謂、丹元爲姚安世、若此詩真得之、姚者毋乃爲坡僂瞞過耶

乾隆丁丑秋中、沈德潛題、時年八十有五

「沈德潛印」(朱文方印)、「歸愚」(白文方印)、「大宗伯章」(朱文方印)

鑑藏印

「沈德潛跋首部」〔圖 1·14〕

「訥菴祕玩」(朱文長方印、劉恕)

「沈德潛跋尾部」〔圖 1·15〕

「子中鑑定」(朱文長方印、盧子中)

「增江廬梅屋所藏真蹟」(朱文方印、盧梅屋)

「獻藍祕玩」(朱文方印)

「一卷梅華之室」(朱文方印)

「吳門程氏楨義鑑定」(朱文方印、程楨義)

「劉蓉峰印」(朱文方印、劉恕)

「寒碧莊祕極印」(朱文方印、劉恕)

「跋紙尾部」〔圖 1·16〕

「曾在東山劉惺常處」(白文長方印、劉恕)

「別紙首部」〔圖 1·16〕

「吳中程楨義心柏氏祕篋圖書」(朱文方印、程楨義)

副卷

箱蓋表〔圖 1·17〕

蘇東坡書太白仙詩二首真蹟副卷

題簽〔圖 1·18〕

蘇文忠公書太白仙詩二首真蹟副卷

長尾雨山跋〔圖 1·19〕 1·23

蘇文忠公書太白仙詩二首、後書、元祐八年七月十日、丹元復傳此二詩、金相蔡松年跋尾云、丹元者道人姚安世自號也、先生將

赴定武、前兩月、與姚相會於京師、出南嶽典寶、東華李真人像、及所作二詩、言、近有人於海上見之、蓋太白云、其事甚奇、攷蘇集施注引葉夢得避暑錄、查注引長公外紀、竝記丹元事、其略云、姚丹元本京師富人王氏子、爲父逐去、事建隆觀一道士、因徧讀道藏、又得其方術、作詩、閒有放浪奇譎語、好爲大言、云、海上神仙宮闕、皆能以技術致之、可使空中立見浮遊淮南、屢易姓名、因王鞏進見蘇公、公喜神仙、奇之以爲太白所化、待之甚嚴、蘇集載書丹元子所示李太白眞詩、可與松年所言互證、公之見丹元、既以爲太白所化、故聞誦此二詩、乃手錄也、但公果信爲太白仙所作耶、不能無疑、蘇集又載丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣吳傳正繼作復次其韻詩、其所示或卽此二詩、而公所次之韻與二詩不同、蘇集不載原作、未能臆斷其然否耳、予竊謂、丹元好爲大言、則此二詩亦安知無非其所自作而假託太白仙以示公平、公評丹元詩、飄飄然有謫仙風氣、則此二詩之似太白、固不足異也、沈德潛跋謂、東坡遊戲直以謫仙自況也、其然、豈其然乎、公書此卷、在元祐八年七月、按年表、公年五十八、以端明侍讀二學士、八月、出知定州、九月二十七日、出都門、十月、到定州任、紀年錄云、八月、以二學士知定州、十二月廿三日、到定州、翁方綱據實錄云、九月、以侍讀學士知定州、所傳迭有異同、馮應榴據續通鑑長編云、定州之除、在六月、年表、紀年錄作八月、均誤、實錄作九月、亦未確、出都門則在九月、到任則在十

月、紀年錄作十二月到任、亦誤也、正與松年跋云將赴定武前兩月相符、當時傳說尙確也、此卷金人獲而尤極尊重、後流傳江南、其所轉歸有印記可徵、康熙中、高士奇得之、箸錄江村銷夏錄、其題跋、金人事歷、張弼與士奇所攷甚詳、無庸予贅及也、公書此卷、與黃州寒食詩卷、傳稱劇迹、兩卷今皆歸我邦、予生何幸、俱得親睹、私喜翰墨多緣、但此卷所書、事差怪奇、故詳記其由、以質筌洲老友、未知允可耶否

大正十五年丙寅十二月上澣、長尾甲

「長尾甲印」(白文方印)、「雨山」(白文方印)

「東坡居士」(朱文方印)

予近獲東坡印、坻此、用志宿緣、款云、元祐二年、軾、甲又識

「石隱道人」(朱文方印)「圖 1. 23. 1」

阿南衡觀記「圖 1. 23」

昭和二年蒲月敬觀、阿南衡「圖 1. 23. 2」

「衡印」(白文方印)、「竹垞」(朱文方印)

滕璠題詩「圖 1. 23」

「有髮？頭陀」(朱文橢圓印)「圖 1. 23. 3」

僊才李翰林、奇才蘇玉堂、天下留大筆、絕代之文章、李唐及趙

宋、兩朝謠頌、金鑾與金蓮、殊遇荷寵光、處世謗譽集、識字
憂患長、遷謫身萬里、富貴夢一場、雀？（豎？）邃思赤壁、風
雨悲夜郎、二公不可見、千載去？瓣香、招魂今聊賦、不用煩巫
陽、太白峨眉巔、被髮下大荒、丁卯八月、滕鏊「圖1:23:4」
「鏊字田器」（白文方印）、「別號十空」（朱文方印）

內藤湖南跋「圖1:24:1」

東坡書太白仙詩二首、有金蔡松年·施宜生·劉沂·高衍·蔡珪
·明張弼諸人跋、著錄于高士奇江邨銷夏錄、士奇謂、蘇文忠行
書真蹟、惟寒食詩與此卷流傳名重、其為劇迹可知矣、太白仙即
道士姚丹元、葉少蘊避暑錄話云、蘇子瞻亦喜言神仙、元祐初有
東人喬全、自言與晉賀水部游、且言賀嘗見公密州道上、意若欲
相聞、子瞻大喜、全時客京師、貧甚、子瞻索囊中得二十縑、即
以贈之、作五詩使全寄賀、子由亦同作、全去訖不復見、或傳妄
人也、（陳后山集有賀水部傳云、後全復來、出賀書、曰、將使
若人通言於君、據此則全非去不復見也、）晚因王鞏又得姚丹元
者、尤奇之、直以爲李太白所化、贈詩數十篇、待之甚恭、姚本
京師富人王氏子、不肖爲父所逐去、事建隆觀一道士、天資慧、
因取道藏偏讀、或能成誦、又多得其方術丹藥、大抵有口才、好
大言、作詩閒有放蕩奇譎語、故能成其說、浮沈淮南、屢易姓名、
子瞻初不能辨也、東坡集中有次丹元姚先生韻二首、又有次秦少

游韻贈姚安世七律、所言皆神仙事、查注云、姚安世疑即姚丹元、
又有次韻王定國書丹元子寧極齋一詩中云、願挂神虎冠、往卜飲
馬隣、王注引趙次公云、蘇州有飲馬橋、丹元子蓋蘇州人也、其
人妖妄、固不足取、然少蘊所云子瞻待之甚恭、浮沈淮南、屢易
姓名、子瞻初不能辨者、亦未必然也、少蘊又云、子瞻在黃州及
嶺表、每旦起、不招客相與語、則必出而訪客、所與游者亦不盡
擇、各隨其人高下、談諧放蕩、不復爲畛畦、有不能談者、則強
之說鬼、或辭無有、則曰姑妄言之、於是聞者無不絕倒、皆盡歡
而後去、設一日無客、則歉然若有疾、其家子弟嘗爲余言之如此
也、韓文公在潮州、與大顛交、歐陽文忠公、乞爲道宮、晚又得
法顯而問說、蓋正人君子閒亦有玩世之言、遊戲之行、東坡之於
丹元、既喜其放言、又愛其詩有奇譎語、謫居無聊、籍以爲消遣
之資、未可以此概論其行義耳、此卷今歸阿部氏爽籟館、已入其
錄、又使余跋其後、乃書所見如此
昭和辛未六月、內藤虎書於恭仁山莊之寶郵籜
「藤虎長壽」（白文方印）、「炳卿」（白文方印）

注

(1) 長尾甲 筆蹟により判定。長尾雨山（一八六四—一九四二）、諱は甲、
字は子生、號は雨山、石隱など。

(2) 蘇桂籜 董其昌「草書波氏語錄」卷（香港佳士得有限公司、二〇〇三

年秋季藝術品拍賣會出品)にも蘇桂移の外題簽あり。

- (3) 光緒甲辰 光緒三十年(一九〇四)。
- (4) 儼齋 王鴻緒(一六四五〜一七二三)、字は季友、儼齋・横雲山人と號した。華亭(上海市松江區)の人。康熙十二年(一六七三)の榜眼で、官は工部尙書・戸部尙書に至った。『明史』『佩文韻府』の纂修に攜わった。
- (5) 劉恕 一七五九〜一八一六、字は行止、一に行之。吳縣(江蘇省蘇州)の收藏家。蘇州城西の花步里に寒碧莊(今の留園)を築いて寒碧主人・花步散人・蓉峰・訥庵・惺常・傳經堂などと號した。
- (6) 元祐八年 一〇九三年。
- (7) 丹元 姚安世(生卒年未詳)、丹元子と號した。晩年の蘇軾と交流のあった道士。
- (8) 趙孟頫 一二五四〜一三二二年。
- (9) 程棫義 道光年間に活動。字號は心柏・漱石。吳縣の人。
- (10) 毛晉 一五九九〜一六五九、字は子晉、號は潛在・隱湖、室名を綠君亭・汲古閣といった。常熟(江蘇省)の人。藏書家で、『十三經』『十七史』『津逮祕書』等を刻した。
- (11) 盧琛 未詳。
- (12) 喬箕成 元至元〜皇慶(十三〜十四世紀)の間の人。字號は達之・仲山。薊縣(天津市)の人。
- (13) 盧子忠 未詳。盧子中とも。
- (14) 盧梅屋 未詳。
- (15) 蘇元瑞 一八四六〜一九二二、字は玉書、號は靄庭、蒙山縣新圩(廣西壯族自治區)の人。官は貴州鎮遠鎮總兵。『鶴荔堂詩草』がある。
- (16) 盧獻南 未詳。
- (17) 韓崇 一七八三〜一八六〇、字は履卿、南陽學子と號した。元和(蘇州)の人。山東額口批驗所大使に任ぜられた。收藏を酷愛し、室號を寶鼎山房・寶鐵齋といった。著に『履卿書畫錄稿』がある。
- (18) 高士奇 一六四五〜一七〇四、字は澹人また淡人、號は江邨・竹窗・瓶廬・抱甕翁など。平湖(浙江省)の人で錢塘(同杭州)に居した。官は禮部尙書。鑑賞をよくし、著に『江村銷夏錄』がある。
- (19) 遺世 蘇軾「前赤壁賦」に「遺世獨立、羽化而登仙」とある。
- (20) 正隆四年 一一五九年。
- (21) 蔡松年 一一〇七〜一一五九、字は伯堅、號は蕭閑老人。眞定(河北省正定)の人。官は右丞相に至り、衛國公に封じられた。諡は文簡。傳は『金史』卷一二五。
- (22) 楊受 未詳。
- (23) 楊昭 未詳。
- (24) 施宜生 ?〜一一六〇(一〇九〇〜一一六三)、原名は達、字は必達、のち名を宜生、字を名望と改めた。浦城(福建省)の人。號は三住老人。官は禮部侍郎・翰林講學士。傳は『金史』卷七十九。
- (25) 孔子作春秋、游夏不能措一辭 曹植「與楊德祖書」に「昔尼父制春秋、游夏之徒、乃不能措一辭」とある。
- (26) 劉沂 傳記未詳。
- (27) 正隆己卯 正隆四年(一一五九)
- (28) 高衍 一〇九九?〜一一六七、字は穆仲、遼陽渤海(遼寧省)の人。官は吏部尙書。
- (29) 蔡珪 ?〜一一五一〜一一七四、字は正甫。眞定の子。蔡松年の子。官は禮部郎中・濰州刺史。傳は『金史』卷一二五。
- (30) 正隆 一一五六〜一一六一年。
- (31) 金主逆亮 金の第四代皇帝海陵王(一一二二〜一一六一、在位一一五〇〜一一六一)。諱は完顔迪古乃、亮は漢名。傳は『金史』卷五。

- (32) 程史 書名。十五卷、宋・嶽珂撰。卷一に「施宜生」の條がある。
 (『學津討原』本)。
- (33) 宋京卞 宋の蔡京(一〇四〇)一(一二二六)・蔡卞(一〇四八)一一(一七)兄弟。
- (34) 季通 蔡元定(一一三五)一(一九八)の字、號は西山。理學家蔡發の子、朱熹の門人。
- (35) 不以人廢言 『論語』衛靈公に「君子不以言舉人、不以人廢言」とある。
- (36) 梁克載 未詳。
- (37) 弘之 生卒年未詳、字は時行、華亭(上海市松江)の人。張弼(後注38)の第三子。弘治九年(一四九六)の進士、官は遷都給事中。傳は『明史』卷一八〇。
- (38) 南安 江西省。張弼は成化十四年(一四七八)南安知府となった。
- (39) 成化十九年 一四八三年。
- (40) 張弼 一四二五)一四八七、字は汝弼、東海と號した。華亭(上海市松江)の人。成化二年(一四六六)の進士で、兵部主事・員外郎から南安知府に昇った。著に季子弘至の輯した『張東海文集』五卷があり、本跋はその卷三に收められている。傳は『明史』卷二八六。天津博物館の藏品に張弼の書になる『草書李白謫仙詩卷』があり、本卷の蘇軾詩と蔡松年跋を録す。
- (41) 康熙癸酉 康熙三十二年(一六九三)。この跋をその卷三に收める『江邨銷夏錄』の自序も同年の成稿である。
- (42) 乾隆丁丑 乾隆二十二年(一七五七)。
- (43) 沈德潛 一六七三)一七六九。字は碣士、號は歸愚。長洲(江蘇省蘇州)の人。乾隆元年(一七三六)博學鴻詞に擧げられ、同四年に進士となり、官は禮部尙書に至った。詩人として名高い。
- (44) 蘇集施注 宋・施元之『施注蘇詩』四十二卷。
- (45) 葉夢得避暑錄 宋・葉夢得『避暑錄話』卷上。
- (46) 查注 清・查慎行補注『東坡先生編年詩』卷三十六「次丹元姚先生二首」。
- (47) 長公外紀 明・王世貞『蘇長公外紀』十二卷。
- (48) 蘇集載書丹元子所示李太白真 『蘇文忠詩合注』卷三十六。
- (49) 蘇集又載丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣吳傳正繼作復次其韻 同右。
- (50) 年表 『東坡先生編年詩』附「年表」。
- (51) 紀年錄 宋・王十朋『增刊校正王狀元集注分類東坡先生詩』附宋・傅藻『東坡紀年錄』「元祐八年癸酉」條。
- (52) 翁方綱 清・翁方綱『蘇詩補注』卷八、「九月出知定州」條。
- (53) 實錄 『哲宗實錄』。
- (54) 馮應榴 清・馮應榴『蘇文忠詩合註』附「年譜」。
- (55) 續通鑑長編 南宋・李燾『續資治通鑑長編』卷四八四「元祐八年六月壬申」條。
- (56) 黃州寒食詩卷 元豐五年(一〇八二)、蘇軾書。臺北・國立故宮博物院藏。
- (57) 清の内府に藏されたが、庚申事變で民間に流出した。跋によれば、馮譽驥(一八二二)一(八四)・盛昱(一八五〇)一(九九)・完顏景賢(一八七五)一(九三一)らの所有を経て顔世清(一八七三)一(一九二九)に歸した。大正十一年(一九二二)、顔が東京にもたらし、菊池晉二(惺堂、一八六七)一(一九三五)が購入した。第二次大戦後、王世杰(一八九一)一(一九八一)に渡り、臺北・國立故宮博物院へ寄贈した。
- (58) 大正十五年丙寅 一九二六年。
- (59) 昭和二年 一九二七年。
- (60) 阿南衡 一九二八年、六十五歳で没した。舊姓は波多野、初名は知彦、

竹垞・臨泉・二雄・醉竹山人などと號した。豊後竹田の人。畫家。初め守山湘帆・淵野桂仙に學び、長崎に移つて木下逸雲に師事した。

(61) 金鑾 翰林學士をいう。唐代、翰林院が金鑾殿と相接していたことから美稱。李白は天寶元年(七四二)に翰林院に入った。

(62) 金蓮 蘇軾が宣仁太后に召見したおり、御前の金蓮の燭臺をとつて送つてもらつた故事にもとづく。「金蓮華炬」は、天子の臣下に對する特別の禮遇。『新唐書』令狐綯傳に「爲翰林承旨、夜對禁中、燭盡、帝以乘輿金蓮華炬、送還院、吏望見以爲天子來、及綯至皆驚」とある。

(63) 識字憂患長 蘇軾「石蒼舒醉墨堂」詩に「人生識字憂患始」とある。

(64) 赤壁 蘇軾が「赤壁賦」を作つたのは黃州左遷時代。

(65) 夜郎 李白が流罪となつた地。現在の貴州省北部。

(66) 丁卯 昭和二年、一九二七年。

(67) 滕釜 未詳。

(68) 葉少蘊避暑錄話 少蘊は葉夢得の字。注(45)參照。

(69) 陳后山集 陳師道『後山先生集』三十卷

(70) 大顛 七三二〜八二四、法號は寶通。廣東潮陽の人。禪宗祖師、石頭希遷の法嗣。潮州靈山寺に住した。

(71) 法顯 薦福寺に住した。

(72) 昭和辛未 昭和六年(一九三一)。

(73) 「湖南文存」卷七(『内藤湖南全集』卷十四)所收。

備考

題跋や題簽・收藏印記などから、大凡の生年の判る人物を、眞贋は別に於て時代順に整理すれば、金の蔡松年・施宜生・劉沂・高衍・蔡珪、元の趙孟頫・喬篔簹、明の張弼・毛晉、清に入つて高士奇・王鴻緒・沈德潛・劉恕・韓崇・程楨義、清末民初では蘇桂移・蘇元瑞となる。

本卷が日本に齎された経緯は不明であるが、博文堂原田悟朗の言によると、東京の中國料理店の主人であつた林文昭から入手して阿部房次郎に納めたという。

著録

高士奇『江村銷夏錄』卷三、卞永譽『式古堂書畫彙考』卷十、吳升『大觀錄』卷五、『大阪市立美術館藏 中國書畫』(朝日新聞社、一九七五年)

參考文獻

伊勢專一郎「李白仙詩卷」解説(『爽籟館欣賞』第一輯、博文堂、一九三〇年)
樋口銅牛「李白仙詩卷」解説(『書道全集』第十八卷、平凡社、一九三〇年)
野本白雲「蘇軾李白仙詩卷跋」解説(『書道全集』第十八卷、平凡社、一九三〇年)
中田勇次郎「李白仙詩卷」解説(『書道全集』第十五卷、平凡社、一九六六年)
外山軍治 蔡松年「蘇軾李白仙詩卷跋」解説(『書道全集』第十六卷、平凡社、一九六六年)
中田勇次郎「李白仙詩卷」解説(『書道藝術』第六卷、中央公論社、一九七一年)
中川憲一「行書李白仙詩卷」解説(『大阪市立美術館・上海博物館中國書畫名品圖録』、二玄社、一九九四年)
鶴田武良「原田悟朗聞書 大正 昭和初期における中國畫コレクションの成立」(『日中國交正常化二〇周年記念 中國書畫名品展』圖録、財團

法人日中友好會館、一九九二年)

「李白仙詩卷」解説(『海を渡った中國の書 エリオットコレクション
と宋元の名蹟』、讀賣新聞社、二〇〇三年)

衣若芬「蘇軾『李白仙詩卷』探研」(『宋代文哲研究集刊』第一期、二〇
一一年六月、一五三〜一九六頁。森岡ゆかり日本語譯「詩仙と坡仙の出
會い 蘇軾「李白仙詩卷」」、『書法漢學研究』第十一號、二〇一二
年)

(弓野隆之)

二 草書李太白憶舊遊詩 黃庭堅筆

藤井齊成會有鄰館

北宋

紙本墨書

三七·〇×三九二·五

本文「圖 2·5」2·12、原色圖版 2」

迢迢訪仙城、三十六曲水迴縈、一溪初入千花明、萬壑度盡遺松聲、銀鞍金絡到平地、漢東太守來相迎、紫陽之真人、邀我吹玉笙、滄霞樓上動仙樂、嘈然宛似鸞鳳鳴、袖長管催欲輕舉、漢中太守醉起舞、手持錦袍覆我身、我醉橫眠枕其股、當筵歌吹凌九霄、星離雨散不終朝、分飛楚關山水遙、余既還山尋故巢、君亦歸家度渭橋、君家嚴君勇貔虎、作尹并州遏戎虜、五月相呼渡太行、摧輪不道羊腸苦、行來北京歲月深、感君貴義輕黃金、瓊杯綺食青玉椀、使我醉飽無歸心、時時出向城西曲、晉祠流水如碧玉、浮舟弄水簫鼓鳴、微波龍鱗莎草綠、興來攜妓恣經過、其若楊花似雪何、紅粧欲醉宜斜日、百尺清潭寫翠娥、翠娥嬋娟初月暉、美人更唱舞羅衣、清風吹歌入空去、歌曲自繞行雲飛、此時行樂難再遇、西遊因獻長楊賦、北闕青雲不可期、東山白首還歸去、渭橋南頭一遇君、鄜臺之北又離群、問余別恨今多少、落花春暮爭紛紛、心亦不可盡、情亦不可極、呼兒長跪緘此辭、寄君千萬遙相憶

箱蓋表「圖 2·1」

黃山谷草書李太白憶舊遊詩卷

箱蓋裏「圖 2·2」

兩山長尾甲署檢「圖 2·2·1」

「長尾甲印」(白文方印)

插鐵裏「圖 2·3·2」

乾隆御賞

黃庭堅書李太白憶舊遊詩

題簽「圖 2·4」

黃庭堅書李太白憶舊遊詩 重華宮

張鐸跋「圖 2·13」2·14」

玩物喪志、君子不取也、余幼而失學、粗喜寫字、雖未知行草之妙、亦嘗留心、如蘇東坡、黃山谷、米元章數家翰墨、甚酷愛、見每以真偽僅能別之、余守長樂郡、客有董君祥者、手攜草書一

幅、自云、沉埋塵中、人鮮能辨、今求教而就贈君、余拂拭展玩、驚喜歎異、謂君祥曰、此山谷真蹟也、居無何、閩士李明父來訪、出而示之、明父隨曰、李太白詩也、前猶有文、惜乎斷簡耳、及觀全帙、迺知憶舊遊寄譙郡元參軍之作、考其遺落、凡八十字、噫、雖豫章之筆無以復加、然謫仙之詩不可不補、故足而紀之、深有望於珠還劍合之時、它日果如吾言、豈不為盛事也哉、其辭曰、憶昔洛陽董糟丘、為余天津橋南造酒樓、黃金白璧買歌笑、一醉桑月輕王侯、海內賢豪青雲客、就中與君心莫逆、回山轉海不作難、傾情倒意無所惜、我向淮南攀桂枝、君留洛北愁夢思、不忍別、還相隨、相隨、（下接）迢迢訪仙城

元貞乙未、烈子野人張鐸書于三山英達坊為己堂

「熙皞□記」(白文方印)「圖 2·14·1」

「張鐸」(朱文方印)「圖 2·14·2」

沈周跋「圖 2·15」

山谷書法、晚年太得藏真三昧、此筆力恍惚、出神入鬼、謂之草聖宜焉、嘗記、元祐中、子瞻蘇公、穆父錢公、同觀公揮翰作草於寶梵僧舍、子瞻賞嘆再四、穆父從傍曰、若見自序真蹟、當更有得、公一時心有所未平、紹聖謫黔中、始見石揚休自序帖、縱觀不已、頓覺超異、乃服穆父之言也、觀此、信是紹聖後所書者、幾與藏真合作、但篇後有缺文、當時藏真自序有二本、一為石揚

休所蓄是矣、一蓄蘇舜欽所、蘇本前亦有所遺、後世以為惋惜、今此卷之不全、殆天亦欲冥契之也、尙古宜寶藏之

正德改元清明日、長洲沈周跋

「啓南」(朱文方印)「圖 2·15·1」

有鄰館觀款「圖 2·16」

有鄰館所藏

「有鄰館珍藏印」(朱文方印)

藤井善三郎

「藤井善三郎」(白文方印)

藤井善嗣

「藤井善嗣」(朱文長方印)

二〇〇四年十一月二十一日於

「有鄰館」(朱文長方印)

鑑藏印

「本紙首部(第一紙)」「圖 2·5·1」

「容齋」(朱文瓢印、用印者未詳)

「(右半缺(山谷))之書」(白文方印、用印者未詳)

「石渠寶笈」(朱文長方印、清·高宗)

「乾隆御覽之寶」(朱文橢圓印、清·高宗)

「石渠定鑑」(朱文圓印、清・高宗)
「寶笈重編」(白文方印、清・高宗)
「重華宮鑑藏寶」(朱文長方印、清・高宗)

〔騎縫 (第二、三紙)〕

〔容齋〕(朱文瓢印)〔圖 2・5・2〕

〔山谷之書〕(白文方印)〔圖 2・5・3〕

〔第四紙〕

「嘉慶御覽之寶」(朱文橢圓印、清・仁宗⁽³⁾)〔圖 2・6・1〕

〔騎縫 (第五、六紙)〕

〔容齋〕(朱文瓢印)〔圖 2・7・1〕

〔山谷之書〕(白文方印)〔圖 2・7・2〕

〔第七紙〕〔圖 2・7・3〕

「宣統御覽之寶」(朱文橢圓印、清・宣統帝⁽⁶⁾)

〔騎縫 (第八、九紙)〕〔圖 2・7・3〕

〔容齋〕(朱文瓢印)

〔山谷之書〕(白文方印)

〔騎縫 (第十、十一紙)〕〔圖 2・9・1〕

「嶽麓樓真石寶」(白文長方印、用印者未詳⁽³⁾)

〔騎縫 (第十一、十二紙)〕〔圖 2・9・1〕

〔容齋 (大半缺失)〕(朱文瓢印)

〔山谷之書〕(白文方印)

〔騎縫 (第十四、十五紙)〕〔圖 2・10・1〕

〔容齋〕(朱文瓢印)

〔山谷之書〕(白文方印)

〔騎縫 (第十五、十六紙)〕

「嶽麓樓真石寶」(白文長方印)〔圖 2・11・1〕

〔騎縫 (第十六、十七紙)〕

「嶽麓樓真石寶」(白文長方印)〔圖 2・11・2〕

〔騎縫 (第十七、十八紙)〕〔圖 2・12〕

〔容齋〕(朱文瓢印)

〔山谷之書〕(白文方印)〔圖 2・12・1〕

〔騎縫（第十八、十九紙）〕

〔嶽麓樓眞石寶〕（白文長方印）〔圖 2・12・2〕

〔第十九紙〕〔原色圖版 2〕

〔乾隆鑑賞〕（白文圓印、清・高宗）〔圖 2・12・3〕

〔騎縫（第十九、二十紙）〕〔圖 2・12・4、原色圖版 2〕

〔嶽麓樓眞石寶〕（白文長方印）

〔本紙尾部（第二十紙）〕〔圖 2・12・4、原色圖版 2〕

〔三希堂精鑑璽〕（朱文長方印、清・高宗）

〔宜子孫〕（白文方印、清・高宗）

〔張氏珍玩〕（白文方印、張金界奴）

〔北燕張氏珍藏〕（朱文方印、張金界奴）

〔機暇珍賞〕（朱文方印、清・高宗）

〔山谷之書（大半缺失）〕（白文方印）

〔毛氏九疇珍玩〕（白文方印、毛九疇）

〔本紙後綾騎縫〕〔圖 2・12・4、原色圖版 2〕

〔御前之寶〕（朱文方印、用印者未詳）

〔後綾〕〔圖 2・12・4、原色圖版 2〕

〔宣統鑑賞〕（朱文方印、清・宣統帝）

〔無逸齋精鑑璽〕（朱文長方印、清・宣統帝）

〔有鄰館珍藏印〕（朱文方印）

〔後綾跋紙騎縫〕〔圖 2・12・4〕

〔右半缺〕□記〕（白文方印、張鐸）

〔右半缺〕鐸〕（朱文方印、張鐸）

〔張鐸跋騎縫〕〔圖 2・13〕

〔嶽麓樓眞石寶〕（白文長方印）

〔同跋騎縫〕〔圖 2・14〕

〔嶽麓樓眞石寶〕（白文長方印）

〔同跋騎縫〕〔圖 2・14〕

〔嶽麓樓眞石寶〕（白文長方印）

〔同跋尾部〕

□□□□〕（朱文方印、用印者未詳）〔圖 2・14・4〕

〔容齋〕（朱文瓢印）〔圖 2・14・3〕

「容齋清玩」(朱文方印、用印者未詳)「圖 2·14·3」

「同跋後綾騎縫」「圖 2·14·4」

「張氏」(左半缺(珍玩))「白文方印、張金界奴」

「北燕張氏」(左半缺(珍藏))「朱文方印、張金界奴」

「沈周跋尾部騎縫」「圖 2·15」

「大觀寶璽」(朱文方印、用印者未詳)

「祕府珍玩」(朱文方印、用印者未詳)

「沈周跋後」「圖 2·16」

「有鄰館印」(朱文方印)

添卷⁽⁴³⁾

題簽「圖 2·17」

宋黃文節公草書李太白憶舊遊詩卷

甲署贈「圖 2·17·1」

「雨山」(朱文方印)

長尾雨山跋「圖 2·18」2「20」

黃文節公艸書李太白憶舊遊詩跋

「長尾甲印」(白文方印)「圖 2·18·1」

「石隱」(朱文方印)

山谷黃公草書、如世所傳秋浦詩及此卷、多太白詩、周平園云、非謫仙妙語、不足發龍蛇飛動之勢耳、虞道園與趙松雪評公書、以爲得張長史圓勁飛動之意、宋潛溪則云、自紹聖乙亥謫黔中、得藏真自序於揚石林家、頓覺超異、諸家各有所見、不必雷同、然亦可以知公書變幻不可端倪矣、趙秉文滏水集云、涪翁自謂中年以草書名世、惟東坡以爲俗、滏水去公不遠、傳聞必有所本、卽如其言、則公草書中年登峰、未造極、所以錢穆父有君見自序真蹟、當更有得之言、及後謫黔中、深契藏真而自入神矣、此卷行筆驟藏真、當是爲公晚年作、而平園以爲中年筆、恐非篤論也、此卷元時已佚八十字、雖云斷簡、墨林星鳳、豈可不寶惜乎、靜堂君宜什襲重護、勿輕眛昧者、卷尾舊有平園枝山跋、不知何時割去、補錄於後以存其舊

昭和壬申秋仲、長尾甲敬識

「雨山」(白文方印)

南豐謚氏收山谷草書李太白歌行一卷、殆中年筆也、予家數卷、亦太白詩、蓋非謫仙妙語、不足發龍蛇飛動之勢耳、今江西豫章、

廬陵、宜春、皆刻山谷眞草、惟蜀中劉氏十卷中草聖尤奇寶、暮年筆也、始穎昌劉昱、字晦叔、與山谷友善、暨其子瓌孫伯虎三世相繼持節於蜀、日哀月聚、固宜得之之富、其閒二說、學者不可不知、乃命小吏錄於左（周必大平園集）

雙井之學、大抵以韻、文章詩樂書畫皆然、姑論其書、積功固深、所得固別、要之得晉人之韻、故形貌若懸、而神爽冥會歟、此卷馳驟藏眞、殆有奪胎之妙、非有若據孔子比也、其故乃是與素同得晉韻然耳、今之師素者、率鹵莽、求諸其外、動至狂惡、又是優孟爲叔敖、抵掌變幻、眩亂人鬼、只能惑楚豎子耳、亦獨何哉、可恨可恨、卷蹟英氣橫發於其本書、故是平生神品、尙古光祿藏護過於至寶、老谷不死之神、在華氏矣（祝允明祝氏集略）

有鄰館觀款「圖2・20」

有鄰館所藏

「有鄰館珍藏印」（朱文方印）

藤井善三郎

「藤井善三郎」（白文方印）

藤井善嗣

「藤井善嗣」（朱文長方印）

二〇〇四年十一月二十一日於

「有鄰館」（朱文長方印）

注

(1) 黃山谷 黃庭堅（一〇四五～一一〇五）、字是魯直。號是山谷、涪翁。洪州分寧（江西省修水）の人。治平四年（一〇六七）の進士。北京國子監教授、校書郎などを經て、起居舍人に拔擢されたが、新法黨から度重なる迫害を受け、黔州（四川省）、戎州（四川省）に流され、一時徽宗の大赦で荆南（湖北省）に留まったが、再び宜州（廣西省）に謫せられて没した。蘇軾に師事し、秦觀、張耒、晁補之とともに蘇門の四學士と稱される。詩を善くし南宋には學ぶものが多く江西詩派の祖とされる。書は唐の顏眞卿、張旭、懷素を學び、北宋四大家の一人に數えられる。『宋史』卷四四四。

(2) 李太白憶舊游詩 注(7)に後述。

(3) 本箱には帙がつく。また、箱内に筆者不明の書付二枚（黃庭堅の略傳および、清・阮元『石渠隨筆』卷二の著錄抜粹）を納入する。

(4) 兩山長尾甲 長尾兩山（一八六四～一九四二）、諱は甲、字は子生、號は兩山、石隱など。

(5) 乾隆御賞 乾隆は清の高宗（一七一～一七九九、在位一七三五～一七九五）の年號で彼を指す。諱は弘曆。清朝最盛期の皇帝として、外政のみならず學術を奨勵し、『四庫全書』を完成させた。また、文物を廣く蒐集し、宮中の書畫著錄として『祕殿珠林』、『石渠寶笈』（初編・續編）を編纂した。本插籤は白玉製で、文字は裏面に刻されている。なお、本品の表装はこの插籤をはじめとして乾隆内府收藏時の状態を留めており、表裝史、鑑賞史の點でも貴重である。

(6) 重華宮 内府の書畫コレクションを多く收藏した紫禁城の宮殿の一つ。西六宮の北側に位置する。本李白詩を書いた黃庭堅の書卷は、『石渠寶笈』には三點が著録される。このうち、『石渠寶笈』續編第二十八、

重華宮藏に録される「黃庭堅書李白憶舊遊詩一卷」が、所藏場所及び印章の記載の一致から、本品に該當すると分かり、張鐸、沈周二跋も逐次収録している。また、初編、貯御書房四、列朝人、書卷次等に著録される「宋黃庭堅書李白詩一卷（次等荒四）」も「素牋本、草書、無款、姓名見跋中、拖尾有張鐸沈周二跋」とあり、別本と推測される。さらに三編、延春閣藏十二に著録される「宋黃庭堅書李白詩一卷」も、李白詩の冒頭八十字を缺き、張鐸跋の内容まで一致するが、沈周跋はない。

(7) この書は、唐・李白「憶舊遊寄譙郡元參軍」七言古詩を書しているが、現状は冒頭部分を缺いている。次の八十字。

憶昔洛陽董糟丘、爲余天津橋南造酒樓、黃金白璧買歌笑、一醉綵月輕王侯、海內賢豪青雲客、就中與君心莫逆、迴山轉海不作難、傾情倒意無所惜、我向淮南攀桂枝、君留洛北愁夢思、不忍別、還相隨、相隨

『分類補註李太白詩』卷十三（四部叢刊）所收。

李白の飲み友達であった元演という人物が、譙郡（安徽省亳縣）の參郡となつて赴任するに際し、様々な思い出を交えて送別とした詩で、李白詩中、有数の長編として知られ、久保天隨譯解『國譯漢文大成續文學部、李太白詩集』（國民文庫刊行會、一九二八年）、青木正兒『漢詩大系 第八卷 李白』（集英社、一九六五年）などに収録されている。制作時期は從來、天寶五載（七四六）とする説が多かったが、『李太白全集編年注釋』（巴蜀書社出版、一九九〇年）は、天寶十載（七五一）、李白五十一歳の作と考證している。

(8) 張鐸 『福建通史』（四庫本）卷二十一、職官二、總部に「市舶提舉司提舉 宋熙、張鐸、陳珪（俱至元間任）」、また卷二十二、職官三、福州府に「元福建路總管府總管、張鐸、燕宗龍、許進（俱至元間任）」とある人物か。注(6)で述べた『石渠寶笈』續編の「黃庭堅書

李白憶舊遊詩一卷」の末尾の考證にも、「志載至元朝、福建路總管府總管張鐸跋所云守長樂郡也」とある。

(9) 玩物喪志 『書』旅獒「玩人喪德、玩物喪志」。

(10) 蘇東坡 蘇軾（一〇三六―一一〇一）の號。

(11) 米元章 米芾（一〇五一―一一〇七）の字。

(12) 長樂郡 福建省閩侯縣。唐代に長樂郡が置かれ、元には福州路の下に長樂縣が置かれた。『元史』卷六十二參照。

(13) 董君祥 不詳。

(14) 李明父 不詳。

(15) 豫章 黃庭堅のこと。出身地の江西の古名で呼ぶ。

(16) 謫仙 李白を指す。『唐書』李白傳を參照。

(17) 珠還 『後漢書』孟嘗傳にみえる故事。合浦の太守の孟嘗が善政を敷いたので、再び眞珠を産出するようになった。

(18) 劍合 『晉書』張華傳の故事。豐城令となつた雷煥が、雙劍を入手し、一つを張華に贈つたが、贈つた劍は後に所在不明となつた。一つは自ら所持していたが、煥がなくなつて後、その子が平津を渡る際にその劍を水中に落としたところ、不明となつていた劍が水中にあり、雙劍が雙龍に化したという故事。

(19) 元貞乙未 元年（一二九五）。

(20) 三山英達坊爲己堂 不詳。三山は福州の南か。「爲己」は『論語』憲問篇の「子曰、古之學者爲己、今之學者爲人」にもとづく。

(21) 「熙皞日記」 次の「張鐸」印とともに讀みは注(6)に述べた『石渠寶笈』續編の記載によつた。

(22) 沈周 一四二七―一五〇九。字は啓南、號は石田、白石翁。長州（江蘇省蘇州）の人。詩書畫に優れ、吳派の形成を擔つた。

(23) 藏眞 唐・懷素の字。

(24) 元祐中 一〇八六―一〇九四。

(25) 穆父錢公 宋・錢勰、字は穆父。翰林學士。行草書に巧み。『宋史』卷三二七。

(26) 同觀公揮翰作草於寶梵僧舍 宋・王明清『揮麈三錄』卷二の逸話を踏まえる。

外祖跋董令升家所藏眞草書千文略云、崇寧初、在零陵、見黃九文魯直云、元祐中、東坡先生、錢四丈穆父飯京師寶梵僧舍、因作草書數紙、東坡賞之不已、穆父無一言、問其所以、但云、恐公未見藏眞眞迹爾、庭堅心切不平、紹聖貶黔中、始得藏眞自敘於石揚休家、諦觀數日、恍然自得、落筆便覺超異、回視前日所作可笑、然後知穆父之言不誣也

この逸話は、宋・李幼武『宋名臣言行錄續集』卷一にも引かれる。

(27) 紹聖謫黔中 黃庭堅が、紹聖二年(一〇九五)より元符元年(一〇九八)まで黔州に貶謫されていたことを指す。

(28) 石揚休 九九五―一〇五七。字昌言、眉山人、進士に擧げられ、刑部員外郎、知制誥などを務め、工部郎中で卒した。『東都事略』卷六十四、『宋詩記事』卷十四。

(29) 當時藏眞自敘有二本 唐の懷素「自敘帖」のこと。現在、臺北故宮博物院には二本(『故宮書畫錄』卷一、卷八に著録)があり、このうち眞蹟とされる前者(『石渠寶笈』續編 寧壽宮著録)に書される南宋・曾紆の跋(紹興二年)に、當時傳來していた諸本についての記述がある。

藏眞自敘、世傳有三、一在蜀中石陽休家、黃魯直以魚牋臨數本者是也、一在馮當世家、後歸上方、一在蘇子美(舜欽)家、此本是也(後略)なお、同本は蘇舜欽本に當たる。

(30) 尙古 本卷を收藏していた無錫(江蘇省)の華理のこと。文徵明に「華尙古小傳」(『甫田集』卷二十七)がある。

華尙古、名理、字汝德、嘗仕有官、稱以其仕不久、又性好古、故遺其官不稱、稱尙古、生尙古、生常之、無錫人、出南齊孝子寶之後、世系高貴不仕、至濟時甫以貧爲郎、後以二子升朝、贈光祿署丞、戶部主事、尙古其次子也(中略)、家有尙古樓、凡冠履盤盂几榻悉擬制古人、尤好古法書名畫鼎彝之屬、每併金懸購不厭而益勤、亦能推別眞贗美惡、故所畜皆不下乙品、時吳有沈周先生號能鑑古、尙古時時載小舟從沈周先生游、互出所藏相與評騭、或彙旬不返、成化弘治間、東南好古博雅之士稱沈先生而尙古其次焉(中略)、尙古所藏古名人文集、若古人理言遺事、古法帖、總數十費、皆數百千不惜、又喜散財利物而不求知主名其事、皆有足稱者、然固富人有識者、所能可以不書、書其大者以傳

(31) 正徳改元 一五〇六年。

(32) 容齋 南宋の洪邁(一一二二―一二〇二)、字は景廬の號が容齋だが、本印との關係は未詳。なお、蘇軾「黃州寒食帖」(臺北故宮博物院)にも「容齋」印があるが、印影は異なる。

(33) 山谷之書 山谷は黃庭堅の號だが、本印の押印者については未詳。

(34) 清・高宗 注(5)参照。

(35) 清・仁宗 顯琰(一七六〇―一八二〇)、清第七代皇帝。清高宗第十子。年號は嘉慶。

(36) 清・宣統帝 溥儀(一九〇六―一九六七)、清末代皇帝。年號は宣統。

(37) 嶽麓樓眞石寶 不詳。

(38) 張金界奴 元の人。九思の子。「蘭亭序」八柱第一本(北京故宮博物院)を宮中に献上したことで知られる。蘇軾「黃州寒食帖」(臺北故宮博物院)に「張氏珍玩」「北燕張氏珍藏」の二印があり、彼の印とされる。ただし、印影は本品とは異なる。

(39) 毛九疇 不詳。

(40) 御前之寶 不詳。

- (41) この張鐸印二顆は、張鐸跋のものと同印。
- (42) 「張氏珍玩」「北燕張氏珍藏」この二印は本紙尾部の印と同印。
- (43) 添卷 本體とともに一つの箱に収納。
- (44) 贖 書畫の卷首の綾のことを指す。
- (45) 秋浦詩 「白髮三千丈」の句で著名な李白の五言詩「秋浦歌」を書したもの。『山谷題跋』卷九に「書自草秋浦歌」があり、明初の宋濂に「跋黃魯直書」(『文憲集』卷十四)がある。また、明・汪珂玉『珊瑚網』卷五、清・卞永譽『式古堂書畫彙考』卷四、卷十一、顧復『平生壯觀』卷二、清・吳升『大觀錄』卷六、『佩文齋書畫譜』卷七十七、九十四などに著録される。
- (46) 周平園云：周必大(一一二六～一二〇四)、字は子充、一字洪道、號は省齋居士、平園老叟。廬陵(江西吉安)の人。紹興二十一年(一一五一)の進士。孝宗朝に翰林學士から、宰相となった。『宋史』卷三九一。「云」以下の引用文は後掲。注(63)参照。
- (47) 虞道園與趙松雪評公書 虞道園は虞集(一二七二～一三四八)、字は伯生、號は道園。仁壽(四川省)の人。博學で元の文宗に重用され、奎章閣學士を授けられた。趙松雪は趙孟頫(一二五四～一三二二)のこと。松雪は號。「山谷公得張長史圓勁飛動之意」の評は、郁逢慶『續書畫題跋記』卷六などに著録される。「黃山谷草書釋典法語」の虞集の跋に見える。
- 余在翰林時、暇日同曼碩揭公過看雲堂吳大宗師、以古銅鴨焚香嘗新杏、因出示黃太史真跡、適松雪趙公亦至謂、「山谷公得張長史圓勁飛動之意、今觀此卷信不誣矣。余以老病空山、安得與諸公同一賞玩耶。臨風執筆、益重懷賢之思云。青城山樵者虞集謹識。
- (48) 張長史 狂草で知られる唐の張旭(八世紀半ばに活躍)のこと。字は伯高。吳郡(江蘇省)の人。左率府長史の官に就いたため、張長史と呼ばれる。
- (49) 宋潛溪 宋濂(一一三二〇～一三八一)、字は景濂、號は潛溪。浦江(浙江省)の人。儒學者として洪武帝に仕え、明の建國に力があつた。書に巧み。
- (50) 紹聖乙亥 二年(一一〇九五)。
- (51) 自紹聖乙亥謫黔中、得藏眞自序於揚石林家、頓覺超異 宋濂「跋黃山谷贈祖元師詩後」(『文憲集』卷十四)の冒頭部分を若干省略しつつ引用している。「揚石林家」は「石揚休家」の誤記か。沈周跋の注(26)も参照。
- (52) 趙秉文滄水集云 趙秉文(一一五九～一二三二)は金の書家。字は周臣、號は閑閑老人。磁州(河北省)の人。「題涪翁草書文選詩後」(『滄水集』卷二十)よりの引用(傍線部)
- 涪翁參黃龍禪、有倒用如來印手段、故其書得筆外意、如莊周之談、大方不可端倪、如梵志之翻着鞵、刺人眼睛、一夫九首、方相四目、夔一足能三足、猿裊籐蟲食木巨石、狼老桤禿、恢詭譎怪、千態萬狀。然涪翁自謂中年以草書名世、惟東坡以爲俗。此其暮年書也、能知東坡之所謂俗則知涪翁之不俗矣。
- (53) 錢穆父 沈周跋の注(25)を参照。
- (54) 平園以爲中年筆、恐非篤論也 後掲の周必大の跋中の語。
- (55) 靜堂君 四代目・藤井善助(一八七三～一九四三)の號。有鄰館の創立者。
- (56) 枝山跋 祝允明(一四六〇～一五二六)、字は希哲、號は枝山。長州(江蘇省蘇州)の人。弘治五年(一四九二)の舉人で、興寧(廣東省)の知事、應天府(南京)通判となった。吳派の代表的書家。この跋文は、明・郁逢慶『續書畫題跋記』卷六、明・汪珂玉『珊瑚網』書錄、卷五、清・卞永譽『式古堂書畫彙考』卷十一などに録される。雨

山は『祝氏集略』から引用したとする。後掲。

(57) 昭和壬申 七年(一九三二)。

(58) 南豊謹氏 不詳。

(59) 豫章、廬陵、宜春 いずれも江西省の地名。

(60) 蜀中劉氏十卷中草聖 不詳。

(61) 劉昱 一〇三四一―一四。字は晦叔、葉城人。嘉祐年間に科擧に及第し、地方官を多く務めて、官は郎中に至った。畢仲游「劉公墓誌」(『西臺集』卷十三)がある。

(62) 其子瓌孫伯虎 前注の「劉公墓誌」の劉昱の子孫についての記述では、玉偏は孫の輩行に當てられている。「孫曰璞、曰琢、曰瓌、曰瑛、曰瑤、曰環、曰珽、曰珣、曰珵、曰珪、曰瑁、曰瑛、曰珽、曰珣、曰珵、曰珪、曰瑁、曰瑛、曰珽、曰珣、曰珵、曰珪、曰瑁」とある。「瓌」が跋文中の「瓌」に當たる可能性もあるが不詳。また曾孫については「曾孫男曰鐸、曰鏜、曰鏗、曰釗、曰鈞、凡五人」とあるが、跋中の「伯虎」に該當するかは不明。

(63) 周必大平園集 本跋は、「跋山谷草書太白詩」として周必大『文忠集』卷四十八に収録され、末尾に「慶元戊午(四年(一一九八))十月丁亥」とある。

(64) 雙井 黃庭堅の出身地である洪州分寧(江西省修水)の地名。茶の產地として知られ、黃庭堅が蘇軾に贈った「雙井茶送子瞻」がある。ここでは、黃庭堅をさす。

(65) 奪胎 宋・釋惠洪『冷齋夜話』卷一に「換骨奪胎法」の一條があり、黃庭堅の詩論が擧げられている。

山谷云、詩意無窮、而人之才有限、以有限之才、追無窮之意、雖淵明少陵、不得工也、然不易其意、而造其語、謂之換骨法、窺入其意、而形容之、謂之奪胎法(後略)

(66) 有若似孔子 孔子の弟子の有若は、風貌が孔子に似ており、師の死後

に弟子たちが彼を孔子の席に座らせ、師の代わりとして仕えたが、弟子の問いに答えられず非難を受けた。『史記』卷六十七、有若傳。

(前略)孔子既没、弟子思慕、有若狀似孔子、弟子相與共立爲師、師之如夫子時也、(中略)已而案然敢問、夫子何以知此、有若默然無以應、弟子起曰、有子避之、此非子之座也

(67) 優孟爲叔敖 優孟は楚の莊王に仕えた名優。楚の相であった孫叔敖の没後、その子が不遇だったので、優孟は孫叔敖に扮して莊王にうったえ、子に封を與えさせた故事。『史記』卷一二六、優孟傳。

(68) 尙古光祿 注(30)参照。

(69) 老谷不死之神 『老子』道經の「谷神不死、是謂玄牝」と、黃庭堅の號の「山谷」をかけたもの。

(70) 祝允明祝氏集略 『祝氏集略』卷二十五に「跋山谷書李詩」として収録。郁逢慶『續書畫題跋記』卷六にも録されるが、やや差異がある。

大抵以韻勝 「大抵韻勝」に作る。

非有若據孔子比也 「非有若似孔子之類也」に作る。

率鹵莽 「大率鹵莽」に作る。

動至狂惡 「動至狂妄」に作る。

亦獨何哉、可恨、可恨 「亦獨何哉」に作る。

末尾に「吳郡祝允明跋」とあり。

備考

本品は無落款であるが、これを黃庭堅の筆としたのは跋者である元の張鐸で、その入手の経緯等も記されている。彼が福建路の總管であった際に、董君祥が塵中にうもれていたのを見つけ出して張鐸に贈り、張氏が黃庭堅筆と鑑定した。その後、李明父なる人物によって、李白「憶舊遊詩」の斷簡と分かったという。明には無錫の收藏家の華理(尙古)が所持し、沈周

と祝允明によつて跋が書されたが、後者は現在は失われている。清には内府に入り、乾隆、嘉慶、宣統の諸印がある。長尾雨山の跋は、昭和七年、藤井靜堂氏のために書されており、箱書も彼の筆によつてゐる。

著録

明・豊坊『眞賞齋賦』卷三、明・郁逢慶『續書畫題跋記』卷六、明・汪砢玉『珊瑚網』書錄、卷五、清・卞永譽『式古堂書畫彙考』卷十一、清・倪濤『六藝之一錄』卷三四三、『石渠寶笈』續編第二十八、清・阮元『石渠隨筆』卷二、清・翁方綱『復初齋文集』卷二十九、清・吳榮光『辛丑消夏記』卷一

参考文献

- 『書道全集』第十五卷（平凡社、一九五四年）
- 『書道藝術』第六卷（中央公論社、一九七一年）
- 『有鄰館精華』（藤井齊成會有鄰館、一九七五年）
- 『有鄰館名品展圖冊』（日本書藝院、一九九二年）
- 『中國書法全集』三十六（榮寶齋、二〇〇一年）
- 『書跡名品叢刊』（二玄社、二〇〇一年）
- 大阪市立美術館編『海を渡つた中國の書 エリオット・コレクションと宋元の名蹟』（讀賣新聞社、二〇〇三年）

〔竹浪遠・伊藤みのり〕

三 草書四帖 米芾筆

重要文化財

大阪市立美術館

北宋

紙本墨書

禮)

「乾隆御覽之寶」(朱文橢圓印、清・高宗)

「完顏景賢精鑑」(朱文方印、完顏景賢)「圖 3・1・2」

〔本紙中央部〕「圖 3・1・3」

「淳化軒圖書珍祕寶」(白文方印、清・高宗)

「石渠定鑑」(朱文圓印、清・高宗)

「寶笈重編」(白文方印、清・高宗)

本文

二五・二×四〇・五

元日明窗焚香、西北向吾友、其永懷可知、展文皇・大令閱、不及他書、臨寫數本不成、信眞者在前、氣馘倅人也、有暇作譜、發一笑於事外、新歲勿招口業佳、別有何得、泗戎東下未、已有書、至彼、俟之

鑑藏印

〔本紙右部〕「圖 3・1・1」

〔內府〕書印」(朱文方印、宋・高宗)

〔三希堂精鑑璽〕(朱文長方印、清・高宗)

〔宜子孫〕(白文方印、清・高宗)

〔黃琳〕私印」(朱文方印、黃琳)

〔陳定〕(朱文方印、陳定)

〔瀨河沈氏勛〕禮彥敬敬齋圖書祕玩之印」(朱文方印、沈勛

〔本紙左部〕「圖 3・1・4」

〔內府〕書印」(朱文方印、宋・高宗)

〔儀周鑑賞〕(白文方印、安岐)

〔陳定〕書印」(白文方印、陳定)

〔石渠寶笈〕(朱文長方印、清・高宗)

〔黃琳〕私印」(朱文方印、黃琳)

〔曾在方夢園家〕(朱文方印、方濬頤)

〔無恙〕(白文長方印、安岐)

〔瀨河沈氏勛禮彥敬〕敬齋圖書祕玩之印」(朱文方印、沈勛

禮)

吾友帖「圖 3·2」

二五·四×四一·九

本文

吾友何（必）不易草體、想便到古人也、蓋其體已近古、但少爲
蔡君謨^(1,2)脚手爾、餘無可道也、比稍用意、若得大年千文、必能頓
長、愛其有偏側之勢出二王外也、又無索靖⁽¹⁾真趾、看其下筆處、
月儀⁽³⁾不能佳、恐他人爲之、只唐人爾、無晉人古氣

鑑藏印

〔本紙右部〕

〔內府〕書印（朱文方印、宋·高宗）「圖 3·2·1」

〔黃琳〕私印（朱文方印、黃琳）「圖 3·2·2」

〔陳定〕（朱文方印、陳定）

〔瀨河沈氏勛禮彥敬敬齋圖書〕祕玩之印（朱文方印、沈勛
禮）

〔完顏景賢精鑑〕（朱文方印、完顏景賢）

〔本紙左部〕

〔內府〕書印（朱文方印、宋·高宗）「圖 3·2·3」

〔儀周鑑賞〕（白文方印、安岐）「圖 3·2·4」

〔瀨河沈氏勛禮彥敬敬齋圖書祕玩之印〕（朱文方印、沈勛

禮）

〔無恙〕（白文長方印、安岐）

中秋詩帖「圖 3·3」

二四·七×三六·三

本文

中秋登海岱樓作⁽¹⁾

目窮淮海兩如銀、萬道虹光育蚌珍、天上若無修月戶、桂枝撐損
向西輪、三四次寫、閒有一兩字好、信書亦一難事、目窮淮海兩
如銀、萬道虹光育蚌珍、天上若無修月戶、桂枝撐損向東輪

鑑藏印

〔前綾〕

〔安儀周家珍藏〕（朱文長方印、安岐）「圖 3·3·2」

〔本紙右部〕

〔內府〕書印（朱文方印、宋·高宗）「圖 3·3·1」

□□（琳印？）（白文長方印？、黃琳？）「圖 3·3·2」

〔瀨河沈氏勛禮彥敬敬齋圖書祕玩之印〕（朱文方印、沈勛
禮）

鑑藏印

「完顏景賢精鑑」(朱文方印、完顏景賢)

「管重光印」(白文回文方印、管重光)「圖 3·3·3」

「江上外史」(朱文方印、管重光)

(本紙左部)

「江上管氏圖書印」(朱文長方印、管重光)「圖 3·3·5」

「內府」(書印)「朱文方印、宋·高宗」「圖 3·3·4」

「儀周鑑賞」(白文方印、安岐)「圖 3·3·5」

「黃琳」(私印)「朱文方印、黃琳」

「復徵」(朱文方印)

「王乳」(朱文方印)

「沈氏彥敬之印」(白文方印、沈勛禮)

(本紙右部)「圖 3·4·1」

「內府」(書印)「朱文方印、宋·高宗」

「黃琳」(私印)「朱文方印、黃琳」

「?」(琳印?)「白文長方印?、黃琳?」

「完顏景賢精鑑」(朱文方印、完顏景賢)

(本紙左部)「圖 3·4·2」

「黃琳美之」(朱文方印、黃琳)

「休伯」(朱文方印、黃琳)

「蘭亭居士鑑賞」(朱文長方印)

「黃琳」(白文方印、黃琳)

「紹」(興)「朱文連珠印、宋·高宗」

「無恙」(白文長方印、安岐)

「機暇清賞」(朱文方印、宋·高宗)

「儀周鑑賞」(白文方印、安岐)

「瀟河沈氏勛禮彥敬敬齋圖書祕玩之印」(朱文方印、沈勛禮)

「敬齋」(家)「藏珍玩」(白文方印、沈勛禮)

「鮮于」(朱文圓印、鮮于樞)

「困學齋徒」(朱文方印、鮮于樞)

海岱帖「圖 3·4」

二三·四×三一·三

本文

兩三日未解、海岱只尺不能到、焚香而已、日短不能晝眠、又少人往還、惘惘、足下比何所樂

米友仁跋「圖 3·5·1、原色圖版 3」

右草書九帖、先臣芾真跡、臣米友仁鑑定、恭跋

都穆跋「圖 3·5·2」

海嶽翁此卷、嘗入紹興祕府、後有其子元暉題識、蓋海嶽平生得意書也、其中有登海岱樓詩一首、下小字注云、三四次寫、閒有一兩字好、信書亦一難事、夫海嶽書、可謂入晉人之室、而其自言乃爾、後之作字者、當何如耶、甲戌九月廿三日、觀於雀靜伯氏、敬題、虎丘山人都穆

「都穆之印」(白文方印)、「都氏玄敬」(白文方印)

鑑藏印

〔本紙右部〕「原色圖版 3」

「乾隆鑑賞」(白文圓印、清·高宗)「圖 3·5」

「壽」(白文長方印、清·高宗)「圖 3·5·1」

〔「瀨河沈氏勛禮彥敬」敬齋圖書祕玩之印〕(朱文方印、沈勛禮)

〔「黃琳」私印〕(朱文方印、黃琳)

〔完顏景賢精鑑〕(朱文方印、完顏景賢)

〔筴在辛〕(朱文方印、筴重光)

〔鬱岡精舍〕(白文方印、筴重光)

「琳印」(白文長方印、黃琳)

「易庵圖書」(白文方印、項聖謨)

「復徵」(朱文方印)

「王乳」(朱文方印)

「賀仲來鑑定珍藏」(朱文方印、賀復徵)

「儀周珍藏」(朱文長方印、安岐)

〔本紙中央部〕「原色圖版 3」

「淳化軒」(朱文長方印、清·高宗)「圖 3·5」

「乾隆宸翰」(白文方印、清·高宗)

「信天主人」(朱文方印、清·高宗)

「永以為好」(白文方印)「圖 3·5·1」

〔本紙左部〕

「古希天子」(朱文圓印、清·高宗)「圖 3·5」

「筴重光印」(白文回文方印、筴重光)「圖 3·5·2」

〔後綾〕

「心賞」(朱文瓢形印、安岐)「圖 3·5·3」

「安氏儀周書畫之章」(朱文長方印、安岐)「圖 3·5·2」

方濬頤題箋「圖3・6」

同治己巳嘉平月、吳介臣同年以此冊見眺、方濬頤誌

「寶米齋」(朱文亞字形印)

舊帖題箋「圖3・7」

米芾草書

注

(1) 展文皇・大令閱 「文皇」は唐・太宗筆「唐文皇手詔」か。

又二帖云增慨・安西是也、上有筆精墨妙印、蘇耆題二字、余得於王詵、以文皇手詔易之、文皇詔、宋素臣尙書家物、余跋贊云、龍彩鳳英、天開日升、亟截多難、力致太平、雲章每發、目動神驚。(『書史』)

「大令」は王獻之筆「十二月帖」か。

晉太宰中書令王獻之字子敬十二月帖、黃麻紙、辭云、十二月割至否、中秋不復、不得想、未復還働、理爲即甚省、如何、然勝人何慶等、慶等大軍、下一印曰鐸書、是唐相王鐸印、後有君倩字、前有絹小帖、是褚遂良題、曰大令十二月帖、此帖運筆如火筋畫灰、連屬無端末、如不經意、所謂一筆書、天下子敬第一帖也、元與快雪帖相連、蘇太簡家物、上有國老・才翁・子美題跋、云鹵僧守一所藏、先令以命服得之、子美子激、字志東、與余分藏、以書畫寶玩易之。(『書史』)

(2) 泗戎東下 未詳。「泗戎」はあるいは人名か。

(3) 宋・高宗 趙構(一一〇七〜一一八七。在位一一二七〜一一六二)。字は德基、徽宗の第九子、欽宗の弟。

(4) 清・高宗 愛新覺羅弘曆(一七一〜一七九九。在位一七三五〜一七九六)。元號は乾隆。

(5) 黃琳(生卒年未詳)字は美之、號は蘊眞・休伯・國器。休寧(安徽省)の人。南京(江蘇省)に寓居した。明・弘治〜正徳年間の藏書家。官は錦衣衛指揮に至った。

(6) 陳定 生卒年未詳。字は以御。崇禎〜康熙間の人。當時の書畫商人らしい。

(7) 沈氏勛禮 沈勛禮。未詳。澗河は錢塘江(浙江省)。

(8) 完顏景賢 一八七五〜一九三一。字は享父、號は樸孫・小如庵。滿州鑲八旗の人。清末の大收藏家。

(9) 淳化軒 清・高宗が圓明園内に設けた書房。

(10) 儀周 安岐(一六八三頃〜一七四五或四六)。字は儀周、號は麓堂・松泉老人。天津の人。あるいは朝鮮の人とも。楊州の鹽商で、收藏に富んだ。『墨緣彙觀』あり。

(11) 方夢園 方濬頤(一八一五?〜一八八九?)。字は子箴、號は夢園。定遠(安徽省)の人。清・道光二十四年(一八四四)の進士。兩廣・兩淮鹽運使、四川按察使などを歴任。收藏に富んだ。『夢園書畫錄』あり。

(12) 蔡君謨 蔡襄(一〇一二〜一〇六七)。字は君謨、書・詩文をよくした。

(13) 大年千文 唐・鍾紹京書の千字文。趙令穰(?〜一〇六一〜一一〇〇)字は大年(が所有していたことからこう呼んだ)。

唐越國公鍾紹京書千文、筆勢圓勁、在丞相恭公孫陳拜處、今爲宗室令穰所購、諸貴人皆題作智永、余驗出唐諱闕筆、及以遍學寺碑對之、更無少異、大年於是盡剪去諸人跋、余始跋之。(『書史』)

(14) 索靖 二三九〜三〇三。字は幼安。敦煌の人。西晉の政治家。張芝の

姉の孫。草書をよくし、特に章草に優れた。

(15) 『月儀帖』 傳索靖筆。

(16) 海岱樓 漣水(江蘇省)にあった淮河に臨した望海樓。米芾の詩文にしばしば出る。

(17) 苴重光 一六二三〜一六九二。字は在辛、號は君宜・蟾光・逸叟・江上外史・鬱岡掃葉道人など。句容(江蘇省)の人。あるいは丹徒(江蘇省)の人とも。順治九年(一六五二)の進士。書畫を善くした。

(18) 復徵 賀復徵か。注(28)参照。臺北故宮博物院の「書畫典藏資料檢索系統」では「復徵」とする。

(19) 王乳 賀復徵の印か。注(28)参照。前注と同じく臺北故宮博物院は「王乳」とする。

(20) 蘭亭居士 未詳。

(21) 鮮于 鮮于樞(一二五七?〜一三〇一?)。字は伯機、號は困學民。直寄老人など。漁陽(河北省)の人。元代前期の書家。

(22) 芾 米芾(一〇五一〜一一〇七)は初名を黻、字を元章、號を襄陽漫仕・海嶽外史などといい、南宮と稱された。襄陽(湖北省)の人。書において宋の四大家に数えられ、畫では米法山水の創始者として知られる。

(23) 米友仁 一〇七四?〜一一五三?。字は元暉、號は懶拙老人。米芾の長子。

(24) 甲戌 正德九年(一一一四)。

(25) 雀靜伯氏 未詳。

(26) 都穆 一四五八〜一五二五。字は玄敬、吳縣(江蘇省)の人。明・弘治十二年(一四九九)進士。金石學家、藏書家。

(27) 易庵 項聖謨(一五九七〜一六五八)。字は初め逸、後に孔彰、號は易庵など多数。嘉興(浙江省)の人。項元汴の孫。明末清初の畫家。

(28) 賀仲來 賀復徵(一六〇〇?)。字は仲來、丹陽(江蘇省)の人。

『文章辨體匯選』あり。

(29) 永以爲好 未詳。

(30) 同治己巳 同治八年(一八六九)。

(31) 吳介臣 未詳。

備考

米芾が知漣水軍であった紹聖四年(一一〇九七)から元符二年(一一〇九九)、四十七歳から四十九歳ごろの作とされる。もとは米友仁の跋に「草書九帖」とあるように、「中秋詩帖」を「目窮帖」との二帖と数え、「徳忱帖」・「草聖帖」・「家計帖」・「奉議帖」を加えた九帖からなり、明・文徵明父子の『停雲館法帖』では九帖刻されており(宋名人書卷第五)、また清・吳升の『大觀錄』にも「米南宮九帖冊」と載せる(卷六)が、清・安岐の『墨緣彙觀』によると、國初に分失して四紙五帖となったという(「考此帖原系九帖、曾刻於停雲館法帖中、國初鑑家甚多、宋之四家墨蹟、南北爭購、吳門有一二於書畫中取利者、往往將東冊分拆、希獲重利、遂使名蹟分失如此、今幸存其四、餘五帖、竝蔣・祝・董三公跋尾、仍在天壤、不知歸于何所」卷一)。「三希堂法帖」も四帖のみを刻す(第十四冊)。のち「徳忱帖」・「草聖帖」は発見され、現在は臺北故宮博物院に收藏される。南宋・高宗および清・高宗の内府などに藏され、完顏景賢の收藏を経たのち原田悟朗を介して武居綾藏に歸し、子息の武居巧によって大阪市立美術館に寄贈された。

著録

汪珂玉『珊瑚網』卷六、吳升『大觀錄』卷六、安岐『墨緣彙觀』卷一、『大阪市立美術館藏中國書畫』(朝日新聞社、一九七五年)

参考文献

- 内藤乾吉「草書四帖」解説（『書道全集』第十五卷、平凡社、一九五四年）
- 中田勇次郎「草書九帖」解説（『書道藝術』第六卷、中央公論社、一九七一年）
- 劉正成主編『中國書法全集』三十七・三十八（榮寶齋、一九九二年）
- 中川憲一「草書四帖卷」解説（『大阪市立美術館・上海博物館中國書畫名品圖録』、二玄社、一九九四年）
- 「草書四帖」解説（『海を渡った中國の書 エリオットコレクションと宋元の名蹟』、讀賣新聞社、二〇〇三年）

〔瀨川敬也〕

四論語集註草稿 朱熹筆

京都國立博物館（上野家舊藏）

南宋

二帖 紙本墨書

各二七・六×一四・二

翁方綱跋「圖 4.7」

子朱子論語集註手稿、四葉、葉十二行、前廿行、目條件也句起、至仲弓問仁章正文止、皆它人正書、中有朱子添改字、後廿八行、敬以持己、至未可遽以為易而忽之止、皆朱子行艸書、近日、吳門所刻書畫錄載論語集註稿廿九葉、晁氏曰、不憂不懼起、至顏淵篇未止、其行數尺寸與此正同、蓋正接此下之葉也、後有吳寬、唐寅、陸毅三跋、陸跋已云、失去前三章矣、又云、是明王文恪所藏、凡上下二冊、上冊先進篇也、吳跋云、此蹟當與天地相為終始者、只此一語足矣、叟何煩以多跋為哉、乾隆四十五年歲次庚子秋七月廿六日、大興後學翁方綱敬書

顏淵篇・上冊

外題簽「圖 4.1」

朱文公論語集註草稿真蹟、二十八行、後學齊彥槐敬題

朱熹像「圖 4.2」

〔帖首第一開右葉〕（筆者不詳）

本文（省略）「圖 4.3」 4.6」

鑑藏印

〔本紙第四開左葉表裝左下接邊〕「圖 4.6」

〔吳平齋審定名賢真跡〕（朱文方印、吳雲）

齊彥槐跋「圖 4.7」

余向藏朱文公手札與米海嶽行書合裝、乃董思翁舊物、思翁跋云、晦菴得筆於曹孟德、神氣飛動、真堪與米顛相伯仲、今復見此論語集註草稿廿八行、高山仰止、肅然生敬、不可以書蹟論也、道光十年歲在庚寅五月七日、婺源後學齊彥槐敬識

吳雲跋「圖 4.7」

余藏有朱文公易繫本義艸稿六十行、烏絲界欄、以大小字分經注書、間有竄改、運筆雖隨意揮灑、益增天趣、與此論語集註二十

八行皆爲文公眞蹟、洵海內無上墨寶、他日得同壽貞石、亦藝林盛事也、同治紀元歲在壬戌孟冬、歸安後學吳雲敬書

「吳雲」(白文方印)、「平齋」(朱文方印)

本文(省略)「圖 4·11」4·25、原色圖版 4」

鑑藏印

〔本紙第一開右葉表裝右下〕「圖 4·11」

「婁東陸愚卿願吾氏祕篋圖書」(朱文長方印、陸愚卿)

〔本紙第十五開右葉中央下〕「圖 4·25、原色圖版 4」

「陸潤之印」(朱文方印、陸時化)

「宜子孫」(白文方印、陸時化)

〔本紙第十五開右葉左下〕「圖 4·25、原色圖版 4」

「遠湖所藏」(朱文方印、陸時化)

〔本紙第十五開右葉表裝右下〕「圖 4·25、原色圖版 4」

「願吾祕玩」(白文方印、陸愚卿)

「懷煙閣陸氏珍藏書畫印」(朱文長方印、陸時化·陸愚卿)

顏淵篇·下冊

外題簽「圖 4·8」

子朱子論語集註稿墨蹟、鳳孫謹署

「鳳孫」(朱文方印、謝鳳孫)

題簽「圖 4·9」

子朱子論語集註稿眞迹、鳳孫謹署

「鳳孫」(朱文方印)

題「圖 4·10」

「紫陽」(朱文長方印)

子朱子論語集註殘稿墨蹟

宣統十七年三月既望、二十三世孫士林謹題

「文公二十三世孫」(朱文方印、朱士林)、「士林長壽印信」(白文方印、朱士林)

觀記

〔本紙第十五開右葉〕「原色圖版 4」

光緒十四年二月二十八日、武進費念慈敬觀「圖 4·25·1」

「費」(朱文方印)、「君直」(白文方印)

乙丑三月三日、南海康有爲敬觀、有爲亦注四書、覽此至高

〔帖尾第一開〕「圖 4·26」

光緒三十有四年歲次戊申正月元日、義州李葆恂、完顏景賢、新建程志和、侯官嚴復、江陰繆荃孫、福山王崇烈、遼陽楊鍾羲、銅梁王瓘、衡水孫桂澂、豐潤端方同拜觀

「端方印信」(白文方印)

宣統壬戌五月、桐鄉勞健拜觀「圖 4·26·1」

王補跋「圖 4·27」4·29

跋朱子論語集註手稿、子朱子集諸儒之大成、萃畢生精力以註論語、稿經數易其自言、字字從戡子上過來、誠不誣已、後人摭拾膚末、矜爲勗獲、甚者謬自居於改錯、不去其說、或蚤被刊落、不欲過而存之者、匪徒見其不學而已、大道不明、人各奮妄說、妒正論、則國家必有隱受其阨者、此其機甚微、而其應立致也、昔之規國者蓋嘗有見於斯矣、閔子騫推勘、不學之害、其弊極於上凌下替、遂以決原氏之亡與周室之必亂、是大可鑑者吁痛已、方當事不師古、眾喙爭囂、民不樂生、四海蕭然、識者窺其唾叱、曾閔蹈藉彝倫恍乎、抱淪胥及溺、率獸食人之戒、而朱子論語集

注手稿適出於其間、沈乙叟得之珍若球鼎、後趣工用珂羅版影印以公天下、殆剝果蒙泉之賴以發生乎、傳由愛文王者嗜昌歎以取味、況此稿實洙泗道脈所寄、今日風教之倡、當無有先於此者、謹端拜而題其末、覽者慎毋視爲劍首之一喙夸、庚申夏五撰、奉乙叟、湘鄉王補

「舊史氏王補」(白文方印)

謝鳳孫跋「圖 4·30」

此註魯論顏淵一冊、是冊共二十四章、今失所註問爲仁起首三章、中閒棘子成一章、向得紫陽夫子註此書、屢易其稿、今就其改正處與監中刻本相較、則已皆同、知是已成之稿、惟浸潤之譜一節註、與刻本少異、細看亦裝池時割裂、微有舛錯、詳味改處、則知先賢之用心良苦、今人天資既鈍、而又不肯研究義理、焉望學業之成進、此爲前明王文恪公所藏、乃是上下二冊、上册是先進註稿、此是下冊、題跋則在下冊、而上冊無、迨後散出、留落二處、而不可復合、陸毅謹書

此冊展轉歸婁東陸氏、載於吳越所見書畫錄、後歸吾師沈乙龔先生、先生昔嘗以是冊授觀、又數歲得張菊生藏本、合印於海上、先生賜寄一冊與書、由此固可以助道味、即書法骨韻、亦可爲學人、則言猶在耳、而吾師歸道山已三年於茲矣、甲子三月、爲且小兒授室成禾、慈護屬錄陸直指跋於南湖舟次、時風雨打窗、

棋聲敲几、境至樂而思、甚長也、鳳孫

「鳳孫」(朱文方印)

觀記(添付・未表裝)「圖4・31」

宣統己未、禾興寐叟沈曾植敬觀

「嶽祠官」(白文方印)

「乾隆年仿金粟山藏經紙」(朱文橢圓印)

參考資料

上野本珂羅版

題簽

朱子論語註稿墨蹟、孝胥

吳寬跋

紫陽夫子集道學之大成、一言一動皆可師法、今觀先進集註手稿、非徒爲後世之珍玩、直與天地爲終始者

弘治壬戌冬十月朔旦、後學吳寬董書

「吳寬」(朱文方印)、「原博」(朱文方印)

鑑藏印

(本紙(跋)・外)

「懷煙閣陸氏珍藏書畫印」(朱文長方印、陸時化・陸愚卿)

「願吾祕玩」(白文方印、陸愚卿)

唐寅跋

「南京解元」(朱文長方印)

昔坡翁嘗謂、昌黎先生道濟「天下」之溺、愚亦謂、自宋之亡、得晦翁夫子註述諸經、故斯文有傳、而五常不廢、可不謂濟天下之溺乎、至于翰墨沈着典雅、雖片縑寸楮、人爭珍祕、不翅如瓊瑤圭璧、況集註手稿、夫豈偶然哉

蘇臺後學唐寅拜識

「伯虎」(朱文方印)、「唐寅私印」(白文方印)

奧付

朱文公論語集註跋語中已言、前後失散、經商務印書館集而爲一連跋語、共計二十有三葉、中華民國八年六月、再版印成、每冊定價上海通用銀幣參圓、外埠酌加運費、匯費、如有翻印、千里必究、特此預白

注

- (1) 朱文公 朱熹(一一三〇―一二〇〇)のこと。字は元晦または仲晦といい、晦庵、紫陽、孝亭、遜翁などと號した。婺源(江西省)の人だが、尤溪(福建省)で生まれた。新儒學における朱子學の始祖である。諡は文。
- (2) 齊彥槐 一七七四―一八四一。字は蔭山、號は梅麓。婺源衝田の人。嘉慶十四年(一八〇九)の進士。「自動渾儀」「中星儀」を發明し、天文學の發達に貢獻した。著書に『梅麓詩文集』『海運南漕叢議』『北極星緯度分表』『天球淺說』『中星儀說』など。
- (3) 吳平齋 吳雲(一八一―一八八三)のこと。字は少甫、號は平齋といい、兩疊軒、二百蘭亭齋、抱疊子とも號した。歸安(浙江省)の人。道光年間の諸生。官は常熟通判などを経て、蘇州知府に至った。金石書畫に詳しく、一大収集家として知られた。號の「兩疊軒」は、齊侯疊二箇を、「二百蘭亭齋」は『蘭亭序』二百本を所藏したことにちなむ。
- (4) 翁方綱 一七三三―一八一八。字は正三、號は覃溪、蘇齋。順天府大興縣(現北京)の人。乾隆十七年(一七五二)の進士。官は内閣學士に至る。『四庫全書』の編纂にも加わった。著書に『石經殘字考』『兩漢金石記』『蘭亭考』など。
- (5) 吳門所刻書畫錄 後述の陸時化『吳越所見書畫錄』のことか。注(70)参照。
- (6) 吳寬 一四三五―一五〇四。字は原博、號は匏庵。長洲(江蘇省)の人。成化八年(一四七二)の進士(狀元)。官は、弘治十六年(一五〇三)に禮部尙書に上った。『憲宗實錄』の編纂に関わり、著書に『匏庵家藏集』がある。
- (7) 唐寅 一四七〇―一五二三。字は伯虎、號は六如。蘇州の人。「吳派四大家」の一人。
- (8) 陸毅 生卒年未詳。康熙二十七年(一六八八)の進士。官は陝西道監察御史。後述する陸時化(一七一四―一七七九)の祖父にあたる。
- (9) 王文恪 王鏊(一四五〇―一五二四)のこと。「文恪」は諡。王鏊の字は濟之、號は守溪という。蘇州の人。成化十一年(一四七五)の進士(探花)。正徳、嘉靖年間の重臣にして文章家。官は正徳初年に戸部尙書、武英殿大學士に至った。著書に『詩文集』『守溪筆記』『震澤紀聞』『本草單方』など。『孝宗實錄』の編纂に加わった。
- (10) 乾隆四十五年 一七八〇年。
- (11) 齊彥槐 注(2)参照。
- (12) 米海嶽 米芾(一〇五一―一一〇七)のこと。「海嶽」は號の「海嶽外史」による。
- (13) 董思翁 董其昌(一五五五―一六三六)のこと。「思翁」は號。
- (14) 晦菴 朱熹のこと。「晦菴」は號。
- (15) 曹孟德 曹操(一五五―二二〇)のこと。「孟德」は字。
- (16) 米顛 米芾のこと。奇石偏愛の奇行から、「顛(狂うこと)」と呼ばれた。
- (17) 高山仰止 崇敬仰慕の情を抱くこと。「高山仰止、景行行止」(『詩經』小雅・車轄)。
- (18) 肅然生敬 嚴肅で敬慕の念を持つこと。「肅然起敬」ともいう。「魯直 專學子美、然子美詩讀之、使人凜然興起、肅然生敬」(宋・張戒『歲寒堂詩話』卷上)。
- (19) 道光十年 一八三〇年。
- (20) 吳雲 注(3)参照。
- (21) 烏絲界欄 黒い墨線(烏絲)で引いた野線がある箋紙。
- (22) 同壽貞石 「貞石」は、堅固な石のこと。轉じて碑石の美稱。ここで

は、朱熹の二種の草稿を指す。

(23) 同治紀元 一八六二年。

(24) 鳳孫 謝鳳孫のこと。字は石欽、または石卿、號は復園。漢川(湖北省)の人。光緒二十八年(一九〇二)の舉人。沈曾植に師事し、書にすぐれた。(筑波大學教授・菅野智明氏の御教示による。)

(25) 宣統十七年 民國十四年(一九二五)。

(26) 二十三世孫士林 朱士林(生卒年未詳)のこと。字は半亭、號は小莊、別號に天悲道人、晚號は壺公など。歸安(浙江省)の人。官は廣東道員。鐵書に優れ、書家として知られた。

(27) 陸愚卿 生卒年未詳。字は願吾、號は魯亭、晚號は息游。太倉(江蘇省)の人。陸時化の子。蘭を好み、詩畫を善くした。著書に『國香志』『懷煙閣留草』。

(28) 陸潤之 陸時化(一七一四〜一七七九)のこと。字は「潤之」、號は聽松、聽松散仙など。室名は翠華軒、嘯雲軒、聽松山房。太倉(江蘇省)の人。貢生として國子監に入ったが、仕官を好まなかつた。乾隆年間の大收藏家として知られる。著書に『吳越所見書畫錄』『書畫說鈴』『賞鑑雜說』『作偽日奇說』など。

(29) 光緒十四年 一八八八年。

(30) 費念慈 一八五五〜一九〇五。字は肥懷、號は西蟲、君直。武進(江蘇省)の人。光緒十五年(一八八九)の進士。翰林院編修を授けられるも、彈劾により野に下り、蘇州に寓居した。書に秀いで、藏書家としても知られた。

(31) 乙丑 民國十四年(一九二五)。

(32) 康有爲 一八五八〜一九二七。字は廣廈、號は長素、後に更生。南海(廣東省)の人。光緒二十一年(一八九五)の進士。光緒帝のもとで變法自強運動を展開するも挫折。思想家として身を立てた。著書に

『新學偽經考』『孔子改制考』『大同書』『日本變政考』『廣藝舟雙楫』など。

(33) 注四書 康有爲の著作に『論語注』(一九〇二)がある。

(34) 光緒三十有四年 一九〇八年。

(35) 李葆恂 一八五九〜一九一五。原名は恂、字は寶卿、號は文石、叔默、戒庵、猛庵、狐笑老人など。直隸易縣(河北省保定)の人。李鶴年の子。官は江蘇候補道。詩書に長じて、端方に重用された。著書に『無益有益齋讀畫詩』『偶園所見書畫錄』など。

(36) 完顏景賢 一八七五〜一九三一。字は亨父、號は補孫、卯庵、小如龕など。滿洲鑲黃旗人。戸部員外郎の華育の子。清末民初の一大收藏家。著書に『三虞堂書畫目』がある。

(37) 程志和 生卒年未詳。號は汪山農、雛庵。新建(江西省)の人。同治七年(一八六八)の進士。官は工部虞衡司員外郎。日清戰爭後の下關條約に憤慨して辭職。鵝湖書院、鹿洞書院を取り仕切り、江西優級師範學堂の監督となった。

(38) 嚴復 一八五四〜一九二一。原名は宗光、字は又陵。後に名を復、字を幾道に改める。侯官(福建省)の人。清末民初の代表的翻譯家、思想家。ハクスリーの『天演論』を譯し、社會進化論を紹介した。

(39) 繆荃孫 一八四四〜一九一九。字は炎之、筱珊。晚號は藝風老人。江陰(江蘇省)の人。光緒二年(一八七六)の進士。京師圖書館(現在の中國國家圖書館)の開設に関わり、中國の圖書館學を開拓した。著書に『藝風藏書記』『藝風堂文集』など。『清史稿』の編纂にも参加した。

(40) 王崇烈 一八七〇〜一九一九。字は漢輔。福山(山東省)の人。王懿榮の次子。光緒二十年(一八九四)の舉人。軍機處存記補用道などを歴任した。

- (41) 楊鍾義 一八六五〜一九四〇。姓は尼堪氏、原名鐘慶。戊戌の政變（一八九八）後に姓を楊、名を鍾義に改めた。字は子勤、聖遺、芷晴、號は留垞、梓勵、雪橋、雪樵など。もとは滿洲正黃旗だが、乾隆年間には漢軍正黃旗となり、遼陽に居住した。光緒十五年（一八八九）の進士。文章家で藏書家として知られた。著書に表兄の盛昱との『八旗文經』があり、ほかに『雪橋詩話』など。
- (42) 王瓘 一八四七生。字は孝玉、孝禹ともいう。銅梁（四川省）の人。舉人で、官は江蘇道員となった。端方の幕僚で、書畫に優れた。
- (43) 孫桂澄 一八五九〜一九三一のこと。字は秋帆。直隸衡水縣の人。孫虞臣（一八四六〜一九一九）の甥。端方と親交があり、光緒二十九年（一九〇三）に琉璃廠で「式古齋」を營んだ。
- (44) 端方 一八六一〜一九一一。字は午橋、號は甸齋。滿洲正白旗人。光緒八年（一八八二）の舉人。清末の官僚で、兩江總督、直隸總督などを歴任した。書畫文物の一大收藏家でもあった。著書に『甸齋吉金錄』『甸齋藏石記』など。諡は忠敏。
- (45) 宣統壬戌 一九二二年。中華民國十一年。
- (46) 勞健 生卒年未詳。字は篤文。桐郷（浙江省）の人。近代音韻學を確立した勞乃宣（一八四三〜一九二二）の子。書と篆刻に精通し、『篆刻學類要』を著した。
- (47) 王補 未詳。民國九年（一九二〇）に『民國廬陵縣志』（江西省）を共同編纂した同名の人物がいる。
- (48) 戩子 金銀をはかる小秤のこと。
- (49) 初獲 初めての收穫、業績。
- (50) 衰說 よこしまな説。
- (51) 閔子騫 閔損（前五三六〜前四八七）のこと。字は子騫。魯國出身。「孔門十哲」の一人。
- (52) 上凌下替 「下陵上替」のこと。世の中が大いに亂れ、下剋上の世をいう。「上陵下替、綱維靡立」（『隋書』煬帝紀上）。
- (53) 原氏之亡與周室之必亂 『春秋左氏傳』昭公十八年の以下の故事による。「秋、葬曹平公、往者見周原伯魯焉、與之語、不說學、歸以語閔子馬、閔子馬曰、周其亂乎、夫必多有是說、而後及其大人、大人患失而惑、又曰、可以無學、無學不害、不害而不學、則苟而可、於是乎下陵上替、能無亂乎、夫學、殖也、不學將落、原氏其亡乎」。
- (54) 眾喙爭聒 ささまざまな議論がおこり、騒がしいこと。
- (55) 曾閔 曾子と閔子を指す。
- (56) 率獸食人 野獸を率いて人を食べさせることで、王が民を虐待することをいう。（『孟子』梁惠王上）。
- (57) 沈乙叟 沈曾植（一八五〇〜一九二二）のこと。字は子培、號は巽齋、乙龕、寐叟、東軒居士など。嘉興（浙江省）の人。光緒六年（一八八〇）の進士。變法運動を推進。上海南洋公學監督。民國六年（一九一七）の張勳復辟に参加した。著書に『元祕史箋註』『蒙古源流箋證』『寐叟題跋』『海日樓文集』など。
- (58) 珂瓊版影印 民國八年（一九一九）に商務印書館から刊行された。注（78）参照。
- (59) 剝果蒙泉 「剝」「蒙」は『周易』の卦の名。「果」「泉」はそれぞれの傳にみえる語で、樹に残った最後の果實、泉は流れの始まりを意味する。かろうじて残ったこの論語集註そのものが印刷され普及することによって世間を潤すの意か。
- (60) 愛文王者嗜昌歎 昌歎は菖蒲のあえもののこと（『春秋左氏傳』僖公三十年）。皮日休「請孟子爲學科書」には、「蓋仲尼愛文王、則嗜昌歎以取味」とある。
- (61) 洙泗道脈 「洙泗」は孔子の出身地・山東省曲阜を流れる泗水とその

支流の洙水のこと。儒學の學統をいう。

(62) 劍首之一映 取るに足らない言説のこと。「劍頭一映」ともいう。「吹劍首者、映而已矣」(『莊子』則陽)

(63) 庚申 民國九年(一九二〇)。

(64) 謝鳳孫 注(24)参照。

(65) 紫陽夫子 朱熹のこと。「紫陽」は號。

(66) 監中刻本 後述の『吳越所見書畫錄』では「監中刊本」とする。國子監の刊本を指すのか未詳。

(67) 王文恪 王鏊を指す。注(9)参照。

(68) 陸毅 注(8)参照。

(69) 婁東陸氏 陸毅、陸時化一族を指す。

(70) 吳越所見書畫錄 陸時化編輯、乾隆四十一年(一七七六)上梓。本跋に書される陸毅跋は「宋朱公顏淵注稿冊」(卷一)に収録されている。

(71) 沈乙盦 沈曾植のこと。「乙盦」は號。注(57)参照。

(72) 張菊生 張元濟(一八六七〜一九五九)のこと。字は筱齋、號は「菊生」。海鹽(浙江省)の人。民國期を代表する出版人。光緒一八年(一八九二)の進士。商務印書館の編譯所所長として古籍の整理復刻に盡力、後に董事長となった。

(73) 甲子 民國十三年(一九二四)。

(74) 且小兒授室成禾 「且小兒」については未詳。「授室成禾」は新婦に家事を教え、子が授かること。

(75) 慈護 沈曾植の嗣子の名である。

(76) 直指 『吳越所見書畫錄』(『續修四庫全書』収録)に載る跋文の印に「直指繡衣御史」があり、陸毅の官位を指す。「直指」とは、直接天子から指揮を受けて地方に使用する官のこと。

(77) 南湖 浙江省嘉興市にある湖。南京の玄武湖と杭州の西湖と並んで

「江南三大名湖」と稱される。

(78) 沈曾植 注(57)参照。

(79) 上野本珂羅版 民國八年(一九一九)に商務印書館から刊行されたコロタイプ本には、現在の上野本にはない吳寬跋や唐寅跋が収録されている。本冊については、以下のウェブサイトに掲出されている画像を参照した。 http://www.kongfz.cn/his_item_pic_9482420/ (閲覧日は二〇一四年八月二十七日)。

(80) 孝胥 鄭孝胥(一八六〇〜一九三八)。宣統元年(一九〇九)から民國十三年(一九二四)まで商務印書館におり、董事をつとめた。

(81) 吳寬 字は原博。注(6)参照。吳寬の文集『匏翁家藏集』にはみえず(卷五十一に「題朱文公詩祠治姦二箴」「題朱陸二先生遺墨後」「跋朱文公三帖」があるのみ)、本跋は、陸時化『吳越所見書畫錄』卷一「宋朱文公顏淵注稿冊」に載る。

(82) 弘治壬戌 弘治十五年(一五〇二)。

(83) 唐寅跋 本跋は、陸時化『吳越所見書畫錄』卷一「宋朱文公顏淵注稿冊」に載る。ちなみに、趙琦美編『趙氏鐵網珊瑚』卷四「朱文公與姪手帖」に著録されている陶宗儀と邵享貞の跋文が本跋の字句と類似する。邵享貞跋は、「昔者坡翁嘗謂、昌黎先生道濟天下之溺、愚亦嘗謂曰、宋之亡、得晦翁先生註述四書諸經、故斯文有傳久、而五常不廢、可不謂滲天下之溺乎、其於片言隻字皆不失格、言畦徑至於私書、尙且其尊卑存亡之序、尊尊幼幼之道、非命世大賢疇、能若此浙右墨跡、自來不得多見、今之收藏者乃亦同姓後人、夫豈偶然哉、嚴陵後學邵享貞敬識」。さらに、この邵享貞跋の前に陶宗儀による以下の跋がある。「子朱子繼續道統、優入聖域、而於翰墨亦加之功、善行草、尤善大字、下筆即沈着典雅、雖片繡寸楮、人爭珍祕、不啻璠璵圭璧、此帖乃與姪家書、略不用意出於自然、尤可寶也、展讀一過、敬識諸卷尾、天臺陶

九成。」

(84) 坡翁嘗謂 坡翁は蘇軾のこと。蘇軾「潮州韓文公廟碑」にある「文起八代之衰、而道濟天下之溺」を指す。

(85) 昌黎先生 韓愈(七六八〜八二四)のこと。中唐の文章家で、唐宋八大家の一人。字は退之、諡は文。鄧州南陽(河南省孟州)の人だが、昌黎(河北省)出身を自稱した。

(86) 天下之溺 『孟子』離婁上の「天下溺援之以道」など。

(87) 五常 人が常に行うべき五種の正しい行い。父義、母慈、兄友、弟恭、子孝。もしくは仁、義、禮、智、信を指す。

(88) 瓊瑤 瓊瑤。魯の寶玉のこと。

(89) 商務印書館 光緒二十三年(一八九七)に上海で夏瑞芳らが創設した出版社。同二十八年に編譯所を開設し、蔡元培、後に張元濟が所長をつとめた。教科書出版などを手がけ、民國期中國最大の出版社となった。

(90) 中華民國八年 一九一九年。

(91) 如有翻印、千里必究 無斷複製を禁じる句。明清の版本からの常套句。

備考

上野家本は、大阪朝日新聞社を創業した一人である上野理一(一八四八〜一九一九、號は有竹齋)およびその一族が収集した中國書畫コレクションにある。ここで取り上げた二帖は、昭和三十五年(一九六〇)、子息の上野精一氏によって京都國立博物館に寄贈された。本帖の來歴や體裁の變遷などの詳細については、後掲の吉原文昭氏の論考(一九六六、二〇〇二)に詳しい。

ちなみに、顏淵篇下冊の端方の觀記は、沈周筆「九段錦圖冊」(京都國立博物館)のそれと同じで、端方(一九〇一)、程志和(一九〇七)、李葆

恂(一九〇七)、王崇烈(一九〇七)、王瓘(一九〇九)の名が見える。

著録

陸時化編輯『吳越所見書畫錄』(乾隆四十一年(一七七六)上梓)

参考文献

宮崎市定「朱子とその書」『書道全集』十六(中國十一宋)(平凡社、一九五五年)

『書道全集』十六(中國十一宋)(平凡社、一九五五年)

『上野有竹齋蒐集 中國書畫圖錄』(京都國立博物館、一九六六年)

吉原文昭「論語集注朱子自筆殘稿に就いて」(『藝林』十七(五、六)、一九六六年。同氏著『南宋學研究』(研文社、二〇〇二年)に再録)

『書道藝術』別卷一(中國名品集)(中央公論社、一九七二年)

『宋元の美術』(中國美術展シリーズ四)(大阪市立美術館、一九七八年)

大阪市立美術館編『宋元の美術』(平凡社、一九八〇年)

大阪市立美術館編『海を渡った中國の書 エリオット・コレクションと

宋元の名蹟』(讀賣新聞社、二〇〇三年)

『書の至寶 日本と中國』(東京國立博物館、朝日新聞社、二〇〇六年)

筆墨精神 中國書畫の世界 特別展覽會 上野コレクション寄贈五

〇周年記念』(京都國立博物館、朝日新聞社、二〇一一年)

『尙意競艷 宋時代の書』(東京國立博物館、臺東區立書道博物館、

二〇一二年)

〔吳孟晉〕

五 論語集註草稿殘稿 朱熹筆

京都國立博物館（長尾家舊藏）

南宋

王澍跋「圖 5.8」

一帖 紙本墨書
各三二・九 × 一五・九

本文（省略）「圖 5.6」{ 5.7」

子罕篇

外箱刻字「圖 5.1」

論語集註殘稿、櫝之題¹⁾

「九丹」(朱文方印、朱櫝之)

外題簽「圖 5.2」

論語集註殘稿、櫝之謹題

「九丹」(朱文方印)

題「圖 5.3」{ 5.5」

子朱子論語集註殘稿真迹

「恭壽」(白文方印、王澍²⁾)

「王澍印信」(白文方印)

往在京師、見朱子易經本義殘稿真迹三卦、觀其改竄處、具見苦心、卷端有朱子象、瞻仰肅然、使人生敬、雍正五年夏四月、蕁

江程九訪余二泉寓舍、出其所藏論語集註殘稿真跡示余、稿雖僅

存一十六行、而朱子注經之苦心、一字一句、一出一入、斟酌盡

善、端可默識、朱子注六經、衣被萬世、雖三家邨稚、皆能誦之、

然知其意者絕少、學者但由此數行觀其改易處、而深求其所以然、

則朱子之心可得、而全部集注之旨趣、皆可推類而盡、則此數行

者、雖謂得其全可也、五月廿又九日、良常後學王澍再拜書後并

篆額

篆額

「虛舟」(朱文方印)「澍」(朱文方印)

鑑藏印

(題第一開右臺紙右下)「圖 5.3」

「長尾甲印」(白文方印、長尾雨山³⁾)

「櫝之」(白文方印、朱櫝之)

「九丹」(朱文方印、朱櫝之)

(題第三開左下)「圖 5.5」

「雨山居士寶之」(朱文長方印、長尾雨山)

「玖聃審定金石書畫之印」(朱文長方印、朱樾之)

〔本紙第一開右下〕「圖 5・6・1」

「九丹鑑藏」(白文長方印、朱樾之)

「蓴江所藏」(白文方印、程茂)

「玖聃心賞」(朱文方印、朱樾之)

〔王澍跋左下〕「圖 5・8」

「長尾甲珍藏印」(朱文方印、長尾雨山)

「玖聃三十年精力所聚」(朱文方印、朱樾之)

「玖聃鑑賞之章」(朱文方印、朱樾之)

〔王澍跋左臺紙左下〕「圖 5・8」

「雨山艸堂」(朱文方印、長尾雨山)

「玖聃平生至愛之物」(朱文長方印、朱樾之)

〔帖末〕「圖 5・9」

「汪芹」(白文方印、汪芹⁹)

「楚央氏」(朱文方印、用印者不明)

長尾雨山跋(添付・未表裝)「圖 5・10」

朱文公手書論語集注殘稿十六行、另王虛舟題跋、子罕篇第十四章注尾三字、第十五、第十六全章、第十七章注尾少十三字、淮安程茂蓴江、永清朱樾之九丹舊藏、大正三年十一月初七日、即夏正甲寅歲九月二十日、購得於北京廠肆、客游匆匆之間獲此鴻寶、可謂天授矣、日本後學長尾甲記

「雨山」(白文方印)

參考資料「圖 5・11」¹、5・15

長尾本珂羅版(發行元、發行年不詳)

帙題簽「圖 5・11」

論語集注殘稿景本

「雨山艸堂」(朱文方印、長尾雨山)

外題簽「圖 5・12」

論語集注殘稿景本

羅振玉跋「圖 5・13」

宋濂洛大儒多善書、平生所見尹河南所書進士尹君墓誌及陳夫

人銘、端凝莊靜、雅近虞永興、又見張南軒先生楷書、在顏平原、蔡忠惠之間、而其所書劉子羽神道碑額、篆法淳雅、可抗衡斯、冰、非二徐所可比肩、而爲德行所掩、世罕有稱其藝術者、紫陽文公書法尤闊肆博大、其擊窠大書浩逸之氣、直可方駕鶴銘、卽尋常著書艸稿、亦縱橫浩蕩、擴之有尋丈之勢、此論語集注手稿、爲新安程蕙江先生舊藏、近歸老友長尾雨山先生、程氏以鹽筴起家、風雅好客、寓居淮安、與其宗人魚門先生齊名、鑑藏尤精、此冊於四十年前、父執鮑少筠齋尹曾挾以示先大夫、玉時以童子侍側、竊得窺見、鮑丈既作古人、此冊遂不知消息、乃雨山游燕市得之、重得拜觀、自媿平生學業不進、老至無成、而於大賢遺澤幸有宿緣、往在吳中、曾見吳氏兩疊軒所藏文公易注稿、又於沈子培尙書許觀論語殘注、今於此冊四十年中兩次敬觀、不得不謂人生厚幸、而雨山先生篤學好古、安貧味道、又爲此冊慶得所歸也、宣統戊午重九前三日、後學上虞羅振玉敬觀並題記於海東寓居之宸翰樓

「羅振玉印」(白文方印)

長尾雨山跋「圖5・14」5・15」

朱子注經、於論孟尤致心力、初輯諸家說爲要義、尋薈萃二程以下諸儒之說爲精義、其後採攝精華撰成集注、嘗謂若得見其底稿以知公苦心酌改之迹、猶親炙公而問其教也、往予留游禹域十有

餘年、問丁氏善本書室藏論語集注稿本、端忠敏開府江南時、購置江寧圖書館、予到館訪求竟無所見、甲寅秋偶過燕京見一書肆、有集注殘稿凡十六行、舊藏程氏蕙江後、傳鮑氏少筠、朱氏九丹、九丹後人出以待價、予乃傾行囊而獲之、既得見公底稿且歸予、有喜出望外矣、夫公以理學大儒、書法亦極精妙、其大字雄豪健邁、雅近率更、少師、小字淳穆、潤雅有二王風格、此稿雖草草走筆、謹嚴不失矩度、筆札之末猶見平生持敬之功、使人不覺斂襟、蓋問內聖外王之道備於孔子、孔子之心法寓六經、六經之精要括於論語、自古諸家釋之已備、然所以治人脩己之道至程朱尤得其要、我邦慶元以來、程朱之學漸行於世、至寬政布異學之禁、不奉程朱者不得用於庠膠、於是海內學風大定、人咸宗尙名教、忠孝大節、由是益彰朱子之於我國家風教所關大矣、此稿雖寥寥殘篇、公心力所集、不與尋常翰墨同、豈可不什襲寶乎哉、大正七年戊午黃華月、後學讚岐長尾甲敬識

「子生」(朱文方印)「雨山」(白文方印)

注

(1) 禮之 朱禮之(一八五九?)のこと。字は淹頌、號は九丹、玖聃、琴客など。永清(河北省)の人。光緒三十三年(一九〇七)に永清存實學堂を開き、河北での教育事業に貢献。清末の一大藏書家として知られた。

- (2) 王澍 一六六八〜一七三九／一七四三。字は若霖、若林とも。號は虛舟、竹雲。金壇（江蘇省）の人。康熙五十一年（一七一二）の進士。官は吏部員外郎。到仕の後に金壇にて「良常山館」をかまえた。書は唐の歐陽詢を學んで楷書を得意とし、帖學派の先驅けとなった。著書に『虛舟題跋』『竹雲題跋』『淳化祕閣法帖攷正』など。
- (3) 雍正五年 一七二七年のこと。
- (4) 蕁江程九 程茂（生卒年未詳）のこと。字は蕁江。淮安（江蘇省）の人。鹽商の程坤（號は退翁）の子。一族出身の經學家の程晉芳（一七一八〜一七八四）と交わり、蕭湖のほとりに晚甘園を造營した。『揚州畫舫錄』卷十五には、「程茂字蕁江、程衛芳字述先、皆工詩、有專集行於世」とある。
- (5) 六經 『詩經』『書經』『禮經』『樂經』『易經』『春秋經』を指す。
- (6) 衣被萬世 廣く恩恵を加えること。「衣被萬物」（『老子』三十四）。
- (7) 三家邨稚 邊鄙な小村にすむ幼子のこと。
- (8) 長尾雨山 一八六四〜一九四二。本名は甲。
- (9) 汪芹 未詳。
- (10) 王虛舟 王澍のこと。「虛舟」は號。
- (11) 第十四章注尾三字 「而正之」の三字をいう。
- (12) 第十七章注尾少十三字 「招搖市過之孔子醜之故有是言」の十三字をいう。
- (13) 淮安程茂蕁江 注(4)参照。
- (14) 永清朱禮之九丹 注(1)参照。
- (15) 大正三年十一月初七日、即夏正甲寅歲九月二十日 大正三年は一九一四年。新曆十一月七日は舊曆九月二十日にあたる。「夏正」は夏王朝の曆で正月を意味する。上海にいた長尾雨山は日本に歸國する前に北遊していた。

- (16) 北京廠肆 琉璃廠の古書肆を指す。
- (17) 鴻寶 大いなる寶。祕書をいう。
- (18) 羅振玉 一八六六〜一九四〇。辛亥革命を契機に宣統三年（一九一）から民國八年（一九一九）まで、八年近くにわたって京都に寓居した。本跋文は、『後丁戌集』（一九三八年。『羅雪堂先生全集』續編二、文華出版公司、一九六九年。『羅振玉學術論著集』十集下、上海世紀出版社・上海古籍出版社、二〇一〇年）に「朱文公論語集注殘稿跋」として収録される。
- (19) 濂洛 濂溪と洛陽を指す。濂溪は周敦頤（一〇一七〜一〇七三）が廬山蓮花峰の麓に構えた書院。洛陽は程顥（一〇三二〜一〇八五）と程頤（一〇三三〜一一〇七）の出身地にちなむ。張載（一〇二〇〜一〇七七）の關中、朱熹の閩とあわせて、「濂洛關閩の學」として宋學の系譜をいう。
- (20) 尹河南 尹洙（一〇〇一〜一〇四七）のこと。字は師魯、河南（河南省洛陽）の人。「河南先生」と稱された。天聖二年（一〇二四）の進士。宋代の古文復興運動に關わり、歐陽脩に引き繼いだ。著に『河南先生文集』『五代春秋』など。
- (21) 進士尹君墓誌及陳夫人銘 未詳。たとえば、「尙書虞部員外郎尹公墓誌銘」（尹仲宣（尹洙の父）ただし「妻張氏」、歐陽脩撰）や「宋故尙書虞部員外郎尹公夫人福昌縣君陳氏墓誌銘」（尹林（尹洙の長兄、尹源の子）の妻、尹焯撰）などがあるが該當せず。『河南先生文集』には、卷十四「故三班奉職尹府君墓誌」（尹湘、字巨川、妻木氏）、卷十五「故天水尹府君墓誌」（尹節、字守約、妻郭氏）、また卷十四「故夫人王氏墓誌」、卷十五「故夫人黃氏墓誌」があるが、いずれも該當しない。
- (22) 虞永興 虞世南（五五八〜六三八）のこと。永興縣公に封ぜられたこ

とにちなむ。

- (23) 張南軒 張栻(一一三三―一一八〇)のこと。字は敬夫。號は南軒。廣漢(四川省)の人。湖湘學派の創始者で、朱熹、呂祖謙とともに「東南三賢」に擧げられた。諡は宣。
- (24) 顏平原 顏真卿(七〇九―七八五)のこと。魯郡開國公、平原太守となったことから顏魯公、顏平原とも呼ばれた。
- (25) 蔡忠惠 蔡襄(一〇一二―一〇六七)のこと。宋の四大家で、諡は忠惠。
- (26) 劉子羽 神道碑額 淳熙六年(一一七九)、福建省崇安縣蟹坑にて建碑。朱熹が撰し、張栻が書した。劉子羽(一〇九六―一一四六)は、徽猷閣待制に至った人物で、朱熹の父・朱松の友人にして朱熹の恩人。
- (27) 斯、氷 李斯(?―前二〇八)と李陽冰(生卒年未詳)のこと。李斯は秦の宰相で小篆の祖。李陽冰は中唐の人で、篆書を中興した。
- (28) 二徐 徐鉉(九一六―九九一)と徐鉉(九二一―九七五)兄弟のこと。兄弟で篆書に通じ、ともに『説文解字』に注釋した。
- (29) 鶴銘 「瘞鶴銘」のこと。鎮江(江蘇省)の焦山にある六朝時代の摩崖。「瘞鶴」とは鶴を埋めるの意で、楷書體を主とし隸體をまじえる。筆者は王羲之(三〇三―三六一)とも梁の道士陶弘景(四五六―五三六)とも傳えられる。
- (30) 鹽筴 鹽務のこと。
- (31) 魚門先生 程晉芳(一七一八―一七八四)のこと。初名は廷鎮、字は「魚門」、號は戢園。歙縣(安徽省)の人だが、淮安に移住。乾隆十七年(一七五二)の進士にして、翰林院編修となった。著に『戢園詩』『詩毛鄭異同考』『春秋左傳翼疏』など。
- (32) 鮑少筠 鮑昌熙(生卒年未詳)のこと。字は少筠。嘉興(浙江省)の人。印人にして收藏家として知られた。著に『金石屑』。
- (33) 澁尹 鹽務を司る官名。
- (34) 先大夫 羅振玉の父、羅樹勛のこと。字は堯欽、號は瑤清。江蘇候補縣丞となった。
- (35) 吳氏兩疊軒 吳雲のこと。「四 論語集註草稿」の注(3)参照。
- (36) 沈子培 沈曾植のこと。「四 論語集註草稿」の注(57)参照。
- (37) 宣統戊午 中華民國七年(一九一八)のこと。
- (38) 海東寓居之宸翰樓 羅振玉の日本での書齋名。羅振玉は日本亡命中、京都の淨土寺町に「永慕園」を構えた。
- (39) 二程 宋の程顥と程頤兄弟を指す。
- (40) 游禹域十有餘年 「禹域」は中國をいう。雨山は、明治三十六年(一九〇三)から大正三年(一九一四)まで上海におり、商務印書館で編譯を主宰した。
- (41) 丁氏善本書室 杭州にある丁丙(一八三二―一八九九)の書齋號。丁丙は清末の著名な藏書家で、字は嘉魚、號は松生、松存、錢塘流民、八千卷樓主人、竹書堂主人など。錢塘(現在の杭州)の人。地方文獻などを豊富に揃え、文瀾閣を復興した。著に『善本書室藏書志』『八千卷樓書籍』など。
- (42) 端忠敏 端方のこと。「忠敏」は諡。兩江總督として端方が南京に赴任したのは光緒三十二年(一九〇六)のことである。
- (43) 江寧圖書館 江南圖書館(現在の南京圖書館)のこと。光緒三十三年(一九〇七)に端方が開設し、繆荃孫が運營を取り仕切った。
- (44) 甲寅 大正三年(一九一四)。
- (45) 率更 歐陽詢(五五七―六四一)のこと。「太子率更令」となったこととにちなむ。
- (46) 少師 柳公權(七七八―八六五)のこと。「太子少師」となったこととにちなむ。歐陽詢とともに楷書の大家。

- (47) 二王 王羲之とその子、王獻之(三四四〜三八六)を指す。
 (48) 慶元 慶長年間(一五九六〜一六一五)と元和年間(一六一五〜一六二四)を指す。
 (49) 寛政布異學之禁 寛政二年(一七九〇)に江戸幕府老中・松平定信が實施した學問統制で、朱子學を正學とした。
 (50) 庠膠 學校のこと。「膠」は「周人養國老於東膠」(『禮記』王制)に見える。
 (51) 大正七年戊午 一九一八年。
 (52) 黃華月 菊花の月のことで、九月を指す。

備考

長尾本は漢學者の長尾雨山が収集し、昭和六十一年(一九八六)に京都國立博物館の所藏となった。本帖の來歴や體裁の變遷などの詳細については、後掲の吉原文昭氏の論考(一九六六、二〇〇二)に詳しい。

著録

- 林泰輔『論語年譜』附録(大倉書店、一九一六年)
 『書道全集』十九(鎌倉時代 高麗(三) 宋・元)(平凡社、一九三一年)

参考文献

- 『書道全集』十六(中國十一 宋)(平凡社、一九五五年)
 吉原文昭「論語集注朱子自筆殘稿に就いて」(『藝林』十七(五、六)、一九六六年。同氏著『南宋學研究』(研文社、二〇〇二年)に再録)
 『書道藝術』別卷一(中國名品集)(中央公論社、一九七二年)
 『筆墨精神 中國書畫の世界 特別展覽會 上野コレクション寄贈五

○周年記念』(京都國立博物館、朝日新聞社、二〇一一年)
 『尙意競艷 宋時代の書』(東京國立博物館、臺東區立書道博物館、二〇一二年)

(吳孟晉)

六 秋野牧牛圖 傳閻次平筆

國寶

泉屋博古館

南宋

絹本着色

九七・五×五〇・六

添狀一「圖6・5」

山水牛一幅 閻次平筆

代六百疋 以上

二月十四日 相阿（花押）

添狀二

〔包紙〕「圖6・6」

南都松屋甚十郎添文狀

內箱蓋表「圖6・2」

山水牛 閻次平筆

內蓋裏貼紙（金箋墨書）「圖6・3」

明閻次平筆牛之畫

秋元子爵家舊藏ニシテ、同家世襲品ノ一ナリシモ、大正六年

入札拂ノ節、入手古畫中ノ名品也、永ク家寶トシテ祕笈愛藏ノ

事

大正十四年初夏、春翠友純誌

相阿彌書付（外題一添狀一）納入箱蓋表「圖6・4」

閻次平牛繪之外題添狀

外題二

〔包紙〕「圖6・8」

閻次平外題、永眞

外題一「圖6・5」

牛 閻次平筆

〔本紙〕「圖6・7」

今度御肝煎ヲ以放申候閻次平之牛之繪、拙者先祖從珠光代々致

所持來候、東山 慈照院殿御物之由、申傳候、則相阿彌外題添

狀指添候、表具者珠光以來者仕置シ不申候、是又右之時分之表

具之由承置候、左様御心得可被成候、恐惶謹言

寛文乙巳八月廿一日

松屋甚十郎、久充「□□」（白文方印）「圖6・7・1」

狩野大學様

〔本紙表〕〔圖 6・9〕
牛、閻次平筆

〔安〕(朱文圓印)⁽¹⁶⁾

〔本紙裏〕〔圖 6・10〕

〔安〕(朱文圓印) * 割印

秋元家世襲張札

〔包紙〕〔圖 6・11〕

秋元家世襲ノ張札

〔本紙〕〔圖 6・12〕

世襲 第百六拾四

〔秋元〕(朱文長方印)

入札〔圖 6・13〕

ハ、閻次平、山水、金參萬圓、山中

〔賣切〕朱文分銅形印、〔札元 東京 山澄 梅澤 中村 平

山堂 川部 京都 林 土橋 大阪 戸田 山中 春海〕

(朱文方印)

秋元子爵家御藏器入札高値表〔圖 6・14〕

支那書畫名家詳傳拔粹〔圖 6・15〕

支那書畫名家詳傳⁽¹⁸⁾

閻次平閻次于皆ナ仲ノ子ナリ。能ク其學ヲ世シ而シテ之レニ過
グ。山水人物ヲ畫ク、畫牛ニエミナリ。次平ハ李唐ニ彷彿シ、
而シテ跡ハ意ニ逮バズ、次于又タ之レニ次グ、孝宗隆興ノ初、
畫圖ヲ進メ旨ニ稱フ、次平ヲ將仕郎ニ、次于ヲ承務郎ニ補シ、
畫院祇候トシ、金帶ヲ賜フ。

出品札一〔圖 6・16〕

重要美術 秋野牧牛圖 傳閻次平筆、兵庫縣、男爵住友吉左衛

門氏藏

〔東洋美術大展覽會印〕(朱文方印)

出品札二〔圖 6・17〕

大阪美術俱樂部創立五十周年大阪商盛組合結成七十年記念

名寶展⁽²⁰⁾

國寶、閻次平、樹下牧童圖

〔株式會社大阪美術俱樂部印〕(朱文方印)

包裂「圖6・18」

閻次平筆 山水之圖

注

- (1) 閻渾平 閻次平の間違い。閻次平は宋代の孝宗の時代(一一六二―一一八九)の畫院畫家。李唐様の山水畫のほか人物畫などもよくし、特に牛の繪にすぐれた。
- (2) 秋元子爵家 もと譜代大名で、舊上州館林藩主。喬知、涼朝が江戸幕府の老中を歴任した。高橋箒庵によれば、喬知は書畫、涼朝は茶の湯を愛好したことから、同家に多くの名品が集まったという。
- (3) 大正六年入札拂 「秋元子爵家御藏器入札」。大正六年(一九一七)五月十四日、東京美術俱樂部にて開催された秋元家の藏品賣立。數多くの優品を所藏していた同家だが、大正五年華族世襲財産法の改正で華族の世襲財産賣却が可能となった直後、入札處分が計畫された。それは赤星家、佐竹侯爵家とならぶ大正の大入札會として記憶された。
- (4) 大正十四年 一九二五年。
- (5) 春翠友純 第十五代住友家當主、住友吉左衛門友純(一八六五―一九二五)。春翠と號した。
- (6) 添狀一とともに卷子裝で、この外題筆者も相阿彌とされる。
- (7) 相阿 相阿彌(?、一五二五)、別稱は眞相、號は鑑嶽。祖父は能阿彌、父は藝阿彌で、三代續けて同朋衆として足利將軍家に仕えた。活動は書畫や唐物の鑑定、座敷飾の指導、連歌師、畫家と幅廣く、父藝阿彌とともに著した祕傳書『君臺觀左右帳記』には、六朝から元にいたる中國畫家の目錄が含まれ、閻次平の略傳も収録される。
- (8) 松屋甚十郎 書簡の署名に久充とあることから、奈良の塗物問屋松屋

の主人、松屋源之丞久充のことか。松屋は室町時代以來、村田珠光の茶風を伝える茶の湯の名家。室町時代末期から江戸前期にかけて、久政、久好、久重(一五六七―一六五二)の三代にわたり招かれた茶會の記録をまとめた「松屋會記」は貴重な史料として知られる。久充は久重の子と考えられる。

- (9) 珠光 村田珠光(一四二三―一五〇二)、幼名は茂吉。室町中期の茶人。「侘び茶」の創始者とされる。珠光が愛好したとされる茶道具「珠光名物」の多くは唐物だが、近年では後世になって珠光に假託されたものと解されている。
- (10) 慈照院殿 足利義政(一四三六―一四九〇)、室町幕府第八代將軍。
- (11) 相阿彌 注(7)参照。
- (12) 寛文乙巳 寛文五年(一六六五)。
- (13) 松屋甚十郎久充 注(8)参照。
- (14) 狩野大學 狩野氏信(一六一六―一六九)、狩野松榮の門人狩野宗心種永を祖とする築地小田原町狩野家の繪師。日光東照宮、内裏、江戸城本丸などの障壁畫制作に参加した。
- (15) 永眞 狩野安信(一六一四―一八五)、名は四郎二郎、源四郎、號は永眞、牧心齋。江戸前期の畫家で、狩野宗家を繼承、中橋狩野家の祖となる。狩野探幽の弟。『畫道要訣』を著した。
- (16) 狩野安信の印。
- (17) 秋元子爵家御藏器入札高値表 大正六年五月十四日、東京美術俱樂部入札部元版。賣立品のうち落札價格百圓以上のものにつき、品名、價格、落札者を記載。
- (18) 支那書畫名家詳傳 近藤元粹(別號南州)が畫史畫傳類から再編した古代から明代の中國畫人傳。青木嵩山堂發行、明治四十二年刊。ここに抜粹された閻次平の項目の出典は『佩文齋書畫譜』と『畫史彙傳』。

大阪市南區天王寺茶白山町の住友家便箋を用いる。

(19) 東洋美術大展覽會 昭和十三年(一九三八)四月一日から二十日まで
大阪市立美術館にて開催。

(20) 大阪美術俱樂部創立五十周年大阪商盛組合結成七十年記念名寶展 昭和
三十五年(一九六〇)大阪美術俱樂部にて開催。

備考

付屬品から傳來をまとめれば、十五、十六世紀(室町時代後期)に相阿彌が代付けをおこなったことから、江戸初期には足利將軍家(義政)の舊藏品とされ、室町後期の茶人村田珠光から奈良の松屋が譲り受け、十七世紀中頃(江戸前期)の久充の代に流出した。それ以後、いつの頃からか大名秋元家に傳來したが、大正六年(一九一七)、同家藏品の賣立で五代住友吉左衛門友純(號 春翠)が入手し、昭和五十五年(一九八〇)、一六代友成により泉屋博古館へ寄贈された。

相阿彌の極札、添狀(代付け)は、現在、鑑箋を臺紙とした卷子装。相阿彌の書付は東山御物の證とされたため、後世の模造がおびただしく存在するが、當本は基準資料から数少ない相阿彌眞筆と確認された。家塚智子「同朋衆の文化史上における評價をめぐって」(『藝能史研究』一五五 藝能史研究會、二〇〇一)。

松屋書簡の内容は、今般手放す牛圖は先祖が珠光より譲り受け代々所持してきたこと、相阿彌外題添狀があること、そして表具は珠光以來のものであることなどである。松屋は多くの茶道具を藏していたことで知られ、「松屋會記」「茶道四祖傳書」はじめ當時の茶會資料でも裏付けられるが、諸記録からは「秋野牧牛圖」の存在はうかがえない。ただ、「松屋三名物」の一に數えられた徐熙の「鷺圖」(現所在不明)もまた珠光好みの表具であったとされ江戸前期の茶席で頻用されており、當時院體畫が茶席に

相應しいとして茶の湯の名家に少なからず藏された様子うかがえる。

なお、本狀は松屋傳來の諸道具が久充の代に散佚したとの指摘を裏付けている。狩野派繪師に出された書翰の目的は、賣却の斡旋か、そのための鑑定證作成の依頼か。この作品には狩野安信筆とされる極札もあり、氏信を介して安信に極書が依頼された可能性もある。狩野安信に對する鑑定依頼人は、武家とならば狩野派の繪師が多かった。(渡邊一「狩野安信添狀留帳(公刊)」『美術研究』四十二、一九三五年)

参考文献

- 瀧精一「秋野牧牛圖」(『國華』一九一號、國華社、一九〇六年)
村山句吾編『和漢名畫選』支那畫之部 七(國華社、一九〇八年)
大阪市立美術館編『開館記念名寶展觀圖錄』四十六(大阪市立美術館、一九三六年)
田中一松・米澤嘉圃・川上涇編『東洋美術』第一卷 三十三(朝日新聞社、一九六七年)
西上實「一 秋野牧牛圖」解説(『泉屋博古 中國繪畫』泉屋博古館、一九九六年)
志賀太郎「五十一 秋野牧牛圖」解説(『室町將軍家の至寶を探る』徳川美術館、二〇〇八)
板倉聖哲「九 秋野牧牛圖」解説(『東山御物の美 足利將軍の至寶』三井記念美術館 二〇一四)

(實方葉子)

七 雪中歸牧圖 李迪筆

國寶

大和文華館

南宋

絹本墨畫淡彩

各二四・二三・八

〔狩野探幽添狀・本紙表〕〔圖7・4・1〕

貴札拜見申候、然ハ二幅壹對牛之繪、李迪眞筆一段見事と奉存候、猶以貴面可得御意候、恐惶謹言

五月廿二日、守信

款記

〔騎牛幅・畫面右下〕〔圖7・1、原色圖版7〕

李迪

狩能法眼 探幽
片石州様 貴□

〔井伊掃部頭書付・封紙〕〔圖7・5〕

黒屋數馬殿、井掃部頭

一、李迪□□

りてき

添狀

〔封紙〕〔圖7・3〕

李迪牛之繪、二幅對

探幽²添狀、壹通

井伊掃部頭卿より黒屋數馬³□

御書付、壹通

覺

〔井伊掃部頭書付・本紙〕〔圖7・6〕

一、二幅一對、李迪牛之繪

一、釜あげくはんふたからかね

一、唐からかねほり物有風爐

一、五徳

一、唐からかね水指ともぶた

右之分此中上節より參入不申候間、返置候、李迪二幅一對狩野法眼老⁶二見せ候得ハ、正筆疑無之候、代三百貫又は望ニ存候ハ、四百貫にても不苦候由、申來候間、左様ニ可有御心得候、以上

七月朔日、井掃部頭
黒屋數馬殿

注

(1) 李迪 錢塘(浙江省)の人、南宋・孝宗朝(一一六三〜一一八九)・光宗朝(一一八九〜一九四)・寧宗朝(一一九四〜一二二四)にかけて畫院畫家として活躍した。牽牛幅の款記の字はやや弱く、畫風が異なることもあつて、別筆とされている。

(2) 探幽 狩野守信(一六〇二〜一六七四)の號。狩野孝信(一五七一〜一六一八)の長男として京都に生まれ、江戸幕府の用命を受けて活躍、鍛冶橋狩野家を興した。

(3) 井伊掃部頭卿 後述黒屋數馬の活躍年代をふまえれば、彦根藩第三代藩主・井伊直澄(一六二五〜一六七六)もしくは直興(一六五六〜一七一七)か。

(4) 黒屋數馬 奥平松平家の家臣・黒屋數馬か。第二代松平忠弘(一六三一〜一七〇〇)の白川藩主時代(一六八一〜一六九二)に權勢をふるつたと言ふ。

(5) 片石州 片桐貞昌(一六〇五〜一六七三)、號石州。大和小泉藩第二代藩主。寛文五年(一六六五)より、江戸幕府茶道師範と稱され、大名茶の本流となる。

(6) 前掲注(2)狩野探幽(一六三八年法眼敍位)、もしくは安信(一六一三〜一六八五、一六六二年法眼敍位)か。

備考

「南都土門本名物集」(奈良・土門家に傳わる名物集の寫本。井上平五郎正式による明和八年(一七七二)の奥書がある。原本は火事で焼失。編者は不明。)に、「雉子兔二幅對。李迪筆常徳院殿より拜領。柳ノ株ニ薄雪ヲ持兔ヲ招(擔)の誤寫か。)カタチ牛ヲ率體之。」とあり、後藤祐乘(一四四〇〜一五二二)が、九代將軍足利義尙(一四六五〜一四八九)より拜領した二幅とわかる。

江戸時代以降の狩野派模本が複數知られ、「寛政三庚申(一七九一)十二月松平下總守殿(松平忠功、一七五六〜一八三〇)より借寫。」と記された千秋文庫所藏の模本、「井伊掃部頭殿(井伊直中、一七六六〜一八三一)より來」と書き込まれた狩野榮信(一七七五〜一八二八)筆の模本(一八〇〇年、東京國立博物館)から、十八世紀には奥平松平家と井伊家に、本作あるいはその模本が所藏されていたとわかる。

大和文華館初代館長・矢代幸雄(一八九〇〜一九七五)は、若い頃、益田鈍翁(益田孝、一八四八〜一九三八)所藏の本作を見て魅了され、大和文華館設立翌年の一九四七年に購入した。

著録

「南都土門本名物集」(『畫說』六七、一九三七年所收)

参考文献

- 「李迪筆雪中牽牛圖」(『國華』七十一、一八九五年)
芳舟「李迪筆雪中歸牧圖」(『國華』一八〇、一九〇五年)
矢代幸雄「歎美抄 李迪筆雪中歸牧圖雙幅」(『大和文華』二、一九五一年)
藤田伸也「李迪筆雪中歸牧圖の對幅の問題について」(『國華』一一八五、一九九四年)
板倉聖哲「館藏品研究 李迪「雪中歸牧圖」騎牛幅」(『大和文華』九十七、一九九八年)
宮崎もも「秋の美・冬の美展によせて 「雪中歸牧圖」の傳來をめぐって」(『美のたより』一六四、二〇〇八年)

(植松瑞希)

八 蜀葵遊猫圖・萱草遊狗圖 傳毛益筆

重要文化財

大和文華館

南宋

絹本墨畫淡彩

各二五・三×二五・八

※文字資料なし

「圖8・1、8・2、原色圖版8、9」

備考

福岡孝悌（一八三五～一九一九）の著録である『水萍賞鑑録』に、「李迪、木芙蓉圖、絹本雙幅、小軸。毛益、靈猫狗子圖、絹本雙幅、小軸。右木芙蓉圖有款。曰慶元丁巳李迪畫。靈猫狗子圖無款。傳爲毛益。而四幅方不盈尺。蓋折古帖爲挂幅者。或云、古帖十葉皆宋代畫、係龜山城主某藏。」とあり、李迪「紅白芙蓉圖」（東京國立博物館）と共に「龜山城主」の所藏であつたと言う。孝悌は、後の『鑑藏目錄』では、「李迪、宣和畫院。紅白木芙蓉圖、有款慶元丁巳李迪畫、絹小對幅。毛益、乾道畫院待詔。靈猫狗子圖、無款、絹小對幅。惟是李毛兩對幅、乙部氏舊藏、且其撰矣。予先年獲之一價人、而世既有評于此畫、今不復贅。因云、乙部氏舊雲州藩老、其家富於收藏、最多宋元古畫、世間或羨之。自今有價人偽裝乙部氏舊藏以售者、可不警哉。」と記し、李迪畫と本作は、松江藩（雲州藩）の家老職にあつた乙部氏の所藏と改める。「龜山城主」と乙部氏の關係は不明。孝悌の後、原三溪（富太郎、一八六八～一九三九）の手に渡り、一九四八年より大和文華館藏。

著録

福岡孝悌『水萍賞鑑録』（青山清吉發行、一八八九年）

福岡孝悌『水萍處鑑藏目錄』（杉原辨次郎發行、一九〇二年）

参考文献

「傳毛益筆遊狗圖」（『國華』二十七、一八九一年）

「傳毛益筆遊猫圖」（『國華』六十九、一八九五年）

「三溪先生の古美術手記」（矢代幸雄『忘れ得ぬ人びと』、岩波書店、一九八四年所収）

板倉聖哲「館藏品研究 傳毛益筆蜀葵遊猫圖・萱草遊狗圖をめぐる諸問題」（『大和文華』一〇〇、一九九八年）

〔植松瑞希〕

九 竹燕圖 馬遠筆

大和文華館

南宋 元

絹本墨畫淡彩

六四・三×三二・二

外箱蓋表「圖9・2」

竹燕子 馬遠筆

内箱蓋表「圖9・3」

竹燕子 馬遠筆

内箱蓋裏「圖9・4」

榮信誌

「伊川院」(朱文方印)

舊題簽「圖9・5」

竹燕 左 馬遠筆

「養朴」(朱文方印)

款記「圖9・6」

馬遠

注

- (1) 馬遠 臨安(浙江省)の人。曾祖父・馬賁以來の畫家一族に生まれ、南宋・光宗朝(一一八九～一一九四)・寧宗朝(一一九四～一二二四)の畫院待詔として活躍した。
- (2) 榮信 狩野榮信(一七七五～一八二八)、號伊川。木挽町狩野家第八代當主。
- (3) 現在は内箱蓋裏に貼り付け。
- (4) 養朴 狩野常信(一六三六～一七一三)、號養朴。尙信(一六〇七～一六五〇)の長男として京都に生まれ、木挽町狩野家を繼ぐ。
- (5) 『淺野侯爵家寶繪譜』は、その下に印があったと言うが、現在では消去されている。

備考

廣島藩淺野家に傳來、一九四八年より大和文華館藏。

著錄

『淺野侯爵家寶繪譜』(藝海社、一九一七年)

参考文献

- 忘庵「古畫竹燕圖解」(『國華』三九七、一九二三年)
衛藤駿「馬遠款 竹燕圖」(『大和文華』五十一、一九六九年)
板倉聖哲「竹燕圖 傳馬遠筆」解説(『南宋繪畫 才情雅致の世界』
根津美術館、二〇〇四年)

(植松瑞希)

十 名賢寶繪冊 夏圭他筆

大阪市立美術館

南宋～明

箱蓋表「圖10・1」

唐宋寶繪冊

內藤虎署

「(印文不明)」 「圖10・1・1」

題簽「圖10・2」

名賢寶繪

第一開・雪山行旅圖「圖10・3」

絹本着色

二四・〇×二一・六

鑑藏印

〔右下〕「圖10・3・1」

〔侍御吳□安家珍藏〕(朱文長方印、用印者未詳)

〔左下〕「圖10・3・2」

〔帝高陽之苗裔〕(朱文長方印、用印者未詳)

第二開・山水圖「圖10・4」

絹本墨畫淡彩

二四・八×二六・二

鑑藏印

〔右上〕「圖10・4・1」

〔宣〕「穌」(朱文連印、北宋・徽宗³)

〔右下〕「圖10・4・2」

〔令之清玩〕(朱文長方印、卞永譽⁴)

〔左上〕「圖10・4・3」

〔儀周珍藏〕(朱文長方印、安岐⁵)

第三開・秋景圖「圖10・5」

絹本着色

二六・六×二〇・四

鑑藏印

〔右上〕「圖10・5・1」

〔江陰夏氏珍玩〕(朱文長方印、用印者未詳⁵)

〔右下〕「圖10・5・2」

〔(右半缺)保之〕(朱文、用印者未詳)

〔左下〕「圖10・5・3」

〔明安國玩〕(白文橢圓印、安國⁷)

第四開・牧牛圖「圖10·6」

絹本墨畫

二四·七×二五·六

鑑藏印

〔左下〕「圖10·6·1」

〔賜〔大半缺落〕〕（朱文、用印者未詳）

第五開・湖畔幽居圖「圖10·7」

絹本墨畫淡彩

二三·八×二四·九

落款「圖10·7·1」

臣夏圭⁽⁸⁾

鑑藏印「圖10·7·2」

〔左上〕

「□府□□」⁽⁹⁾（朱文方印、南宋·理宗⁽¹⁰⁾）

第六開・瀑邊遊鹿圖「圖10·8、原色圖版10」

絹本墨畫淡彩

二三·二×二三·六

鑑藏印

〔中央下〕「圖10·8·1、原色圖版10」

〔印文不明〕

題

馬和之、宋禮部侍郎、畫學李伯時、而山水清逸過之⁽¹⁾
董其昌題⁽¹³⁾

「太史氏」⁽¹⁾（白文方印）、「董其昌印」⁽²⁾（白文方印）「圖10·8·2」

「□□山□□□□紙」⁽³⁾（朱文長方印）「圖10·8·3」

第七開・觀瀑圖「圖10·9」

絹本墨畫淡彩

二三·二×二三·四

鑑藏印

〔右下〕「圖10·9·1」

〔大半缺落〕

〔左下〕「圖10·9·2」

「明安國玩」⁽⁴⁾（白文橢圓印）

第八開・狸奴蜻蛉圖「圖10·10」

絹本着色

落款「圖 10·10·1」

二五·六 × 二六·四

紹熙癸丑歲李迪畫

「□□□書」(朱文方印、南宋·理宗)

絲綸閣下文書靜、鍾鼓樓中刻漏長、獨坐黃昏誰是伴、

紫薇花對紫微郎

「李迪印章」(朱文方印)

「緝熙殿書」(朱文方印、南宋·理宗)「圖 10·12·3」

對題紙

「金粟山□□紙」(朱文橢圓印)「圖 10·10·2」

第十一開·風雨樓閣圖「圖 10·13」

絹本墨畫

第九開·漢武帝會西王母圖「圖 10·11」

絹本着色

落款「圖 10·13·1」

臣馬麟

二三·一 × 一七·九

二三·五 × 二三·六

題

第十開·古松樓閣圖「圖 10·12」

絹本墨畫淡彩

晚風飄暑去、新雨送涼來

「乙卯」(朱文瓢印)、「御書之寶」(朱文方印、用印者未詳)

二四·二 × 二四·九

「圖 10·13·2」

鑑藏印

「(左上)「圖 10·12·1」

「□府□□」(朱文方印、南宋·理宗)

第十二開·納涼圖「圖 10·14」

絹本着色

題

「(右上)「圖 10·12·2」

落款「圖 10·14·1」

夏珪

二〇·四 × 二三·八

鑑藏印

〔右下〕「圖 10・14・2」

〔柯九思〕（朱文方印、柯九思）

〔左下〕「圖 10・14・1」

〔印文不明〕（白文長方印）

内藤湖南跋「圖 10・15、原色圖版 5」

澁縣陳壽卿舊藏名賢寶繪集冊、已著錄于李竹朋書畫鑑影中、冊中畫十二幅、皆絹本、第一開、重設色沒骨畫、竹朋以爲意在楊昇僧繇之閒、其爲唐人筆無疑、第二開、墨筆垂楊牧牛圖、用筆似趙大年、而更高古、豈戴氏嵩嶧之徒所作歟、第三開、墨筆村家圖、有款、俄見似石罅、諦視之、則夏圭兩字也、第四開、微着色水莊圖、蓋淳化景德閒人筆、第六開、墨筆激湍圖、董思翁別幅、題爲馬和之筆、第七開、墨筆山水小景、意似夏禹玉、第八開、設色狸奴圖、有紹熙癸丑李迪款、第九開、著色漢武會西王母圖、意在陳居中趙伯驢閒、第十開、墨筆山水小景、的是馬欽山畫、第十一開、墨筆柳亭風雨圖、款曰馬筆、酷似馬麟筆意、惟第五開、第十二開、畫較劣、豈明人筆歟、第十開、第十一開、對幅題詩句、有緝熙殿寶乙卯御書之寶三璽、蓋爲南宋理宗御書、此冊今歸武居君、君近年連獲劇迹、殆有天幸、宜金匱石室以固鑄之也

壬戌四月記、内藤虎

「臣虎」(朱文白文方印)、「寶左倉主」(朱文方印)

〔圖 10・15・1〕

鑑藏印

「陳氏家藏」(白文方印、用印者未詳)

注

(1) 内藤虎 内藤虎次郎(一八六六—一九三四)、號の湖南で知られる。

秋田縣出身、京都帝國大學教授(東洋史學)。中國書畫への造詣も深く、大正・昭和時代の關西におけるコレクション形成を主導した。

(2) 帝高陽之苗裔 「離騷」の一句。

(3) 徽宗 一〇八二—一一三五。北宋第八代、建中靖國・崇寧・大觀・政和・重和・宣和年間の皇帝。名は佶。在位一一〇〇—一一二五。宮廷畫院の制度を整え、自身も書畫家として活躍した。内府所藏の書畫を著録した『宣和書譜』、『宣和畫譜』の編纂を命ずる。

(4) 卞永譽 一六五四—一七一二。字令之、號仙客・仙容。漢軍鑲紅旗の人。蔭生、刑部侍郎に至る。著に『式古堂書畫彙考』がある。

(5) 安岐 一〇八三—?。字儀周、號麓村・松泉老人。天津(天津市)の人。收藏家として知られる。著に『墨緣彙觀』がある。

(6) 傳盛懋「冬景山水圖頁」(フリーア・ギャラリー)にも同文の印が捺される。

(7) 安國 一四八一—一五三四。字民泰、號桂坡。無錫(江蘇省)の人。多くの古書畫・珍籍を收藏し、銅版活字を利用した出版でも知られる。

- (8) 夏圭 夏珪、字禹玉、錢塘(浙江省)の人。南宋・寧宗朝(一一九四〜一二二四)に畫院待詔となる。
- (9) 南宋・理宗の「御府圖書」印の一部。本冊第十開、および對幅の題にも同印が確認できる。この印については、王耀庭「宋畫款識型態探討」(『故宮學術季刊』三十一卷四期、二〇一四年) 參考。
- (10) 理宗 一二〇五〜一二六四。南宋第五代皇帝。名は昀。在位一二二四〜一二六四年。
- (11) 馬和之 錢塘(浙江省)の人。南宋・高宗朝(一一二七〜一一六二)・孝宗朝(一一六三〜八九)にかけて、皇帝の命を受けて活躍した畫家。
- (12) 李伯時 李公麟(一〇四九〜一一〇六)、字伯時、號龍眠居士、舒州(安徽省)の人。熙寧三年(一〇七〇)の進士で、官は朝奉郎に至る。畫家としても高名で、特に白描を得意とした。
- (13) 董其昌 一五五五〜一六三六。字玄宰、號思白、華亭(上海市)の人。萬曆十六年(一五八八)の進士、官は南京禮部尙書・太子太保に至る。書畫家・收藏家・批評家として有名で、著に『容臺集』・『畫禪室隨筆』がある。
- (14) 紹熙癸丑歲 紹熙四年(一一九三)。
- (15) 李迪 錢塘(浙江省)の人、南宋・孝宗朝・光宗朝(一一八九〜一一九四)・寧宗朝(一一九四〜一二二四)にかけて畫院畫家として活躍した。
- (16) 唐・白居易「紫薇花」『白氏長慶集』卷十九所收。
- (17) 緡熙殿は理宗が講殿として建設した。紹定六年(一二三三)に完成。
- (18) 馬麟 馬遠の子。南宋の寧宗・理宗に仕え、畫院祇候として活躍した。「麟」の字の「鹿」を短く、「彡」を伸ばす本款書の書風は、馬麟「夕陽山水圖」(根津美術館)等と類似するが、字體のくずれから明らかな偽款と見られる。
- (19) 乙卯 理宗朝・寶祐三年(一二五五)か。後述の内藤湖南跋は二印の用印者を理宗とする。
- (20) 柯九思 一二九〇〜一三四三。字敬仲、號丹丘生、仙居(浙江省)の人。元・文宗に信任され、奎章閣鑑書博士を授けられた。
- (21) 二字目は「易」、三字目は「安」と讀める。
- (22) 『湖南文存』(『内藤湖南全集』十四、筑摩書店、一九七六年所收) 卷八に載る。
- (23) 陳壽卿 陳介祺(一八一三〜一八八四)、字壽卿、號篋齋、濰縣(山東省)の人。道光二十五年(一八四五)の進士。金石學者として知られる。
- (24) 李竹朋書畫鑑影 李佐賢『書畫鑑影』。卷十二に陳介祺所藏として「名賢寶繪集冊」が載る。
- (25) 楊昇僧繇 楊昇。唐・玄宗朝(七一二〜七五六)・肅宗朝(七五六〜七六二)の宮廷畫家。張僧繇。梁(南朝)の宮廷畫家。共に明末には青緑の沒骨山水畫家として知られ、倣古の對象となった。
- (26) 趙大年 趙令穰(?〜一〇六一〜一一〇〇?)、字大年、北宋・太宗(位九六〇〜九七六)の五世孫にあたる。小景畫を得意とした。
- (27) 戴氏嵩嶧 戴嵩は唐の畫家。韓滉(七二三〜七八七)を師とし、弟の暉と共に畫牛を得意とした。
- (28) 淳化景德 北宋・淳化年間(九九〇〜九九四)から景德年間(一〇〇四〜一〇〇七)。
- (29) 董思翁 董其昌。前掲注(12) 參照。
- (30) 漢武會西王母圖 西王母が漢・武帝(位前一四一〜八七)のもとを訪れ、神仙の道を説いたと言う小説『漢武故事』や『漢武帝内傳』の挿話を描いたもの。

(31) 陳居中趙伯驥 陳居中は南宋・嘉泰年間(一二〇一〜一二〇四)の畫院待詔。人物蕃馬を得意とした。趙伯驥(一二二四〜一一八二)、字希遠。伯駒の弟で宗室畫家。

(32) 馬欽山 馬遠、字欽山、臨安(浙江省)の人。曾祖父・馬賁以來の畫家一族に生まれ、南宋・光宗朝・寧宗朝の畫院待詔として活躍した。

(33) 武居君 武居綾藏(一八七一〜一九三二)、内外綿頭取、後在華日本紡績同業會委員長を務める。

(34) 壬戌 大正十一年(一九二二)。
(35) 陳介祺の子孫と推定できる。

備考

本圖冊は陳介祺の舊藏で、『國華』五五三(一九三六年)の作品解説によれば、清末に完顔景賢(一八七五〜一九三一)の手に渡ったと言う。鑑藏印等は残っておらず、『三虞堂書畫目』にも記載がないため、『國華』の記事が何に基づいたか不明である。また、瀧精一も「盧鴻草堂十景圖卷」(大阪市立美術館)の解説(『國華』五八五、一九三九年)の中で本圖冊が「草堂十景圖卷」や「伏生授經圖」と共に景賢の所藏であったと言う。内藤湖南の跋により、一九二二年には武居綾藏の所有となったことがわかる。

『爽籟館欣賞 第二輯』編纂中の阿部房次郎(一八六八〜一九三七)は、一九三五年十二月十三日付長尾雨山(一八六四〜一九四二)宛書簡の中で、「許道寧 山水」(「幽林樵隱圖」)、「宋畫 散牧」(無名氏「散牧圖」)、「張子政 燕之圖」(張中「垂楊雙燕圖」)、「傅山 山水」(「斷崖飛帆圖」)の四件を削除し、代わりに、近日中に寫眞を送ると言う「宋畫七點」を加えたので、新たに解説を書くよう依頼している。續いて、一九三六

年一月十七日付書簡では、先般削除の作品の差し替えとして、太田氏に持たせた「名賢寶畫集冊十二枚之内八枚」の寫眞を加えるよう述べる。太田氏は京都の美術商・太田貞造。このことから、房次郎が本畫冊を入手したのは、一九三五年十二月頃と推測できる。二輯は、房次郎没後に阿部孝次郎編、原田謹二郎解説で出版されたが、當初の房次郎の企畫とは異なっている。

著録

李佐賢『書畫鑑影』十二、阿部孝次郎『爽籟館欣賞 第二輯』(博文堂、一九三九年)

参考文献

「傳馬遠筆樓閣山水圖及題贊解」(『國華』五五三、一九三六年)
「宋畫湖畔幽居圖解」(『國華』五六四、一九三七年)
「漢武會西母圖解」(『國華』五八一、一九三九年)
「宋畫牧牛圖解」(『國華』五八二、一九三九年)
「宋畫高士觀瀑圖解」(『國華』五八九、一九三九年)
『大阪市立美術館藏 中國繪畫』(朝日新聞社、一九七五年)
『宋元の繪畫』(大阪市立美術館、二〇〇一年)
板倉聖哲「觀瀑圖」「湖畔幽居圖」「古松樓閣圖・七絶書」解説『南宋繪畫 才情雅致の世界』(根津美術館、二〇〇四年)

(植松瑞希)

十一 遠浦歸帆圖 牧谿筆

重要文化財

京都國立博物館

南宋

一幅 紙本墨畫

三二・三 × 一〇三・六

外箱蓋表「圖 11・2」

遠浦歸帆、八軸之内、牧溪筆

内箱蓋表「圖 11・3」

遠浦歸帆、牧溪筆

内箱蓋裏「圖 11・4」

慈照院義政公所持、八景大軸

鑑藏印

〔本紙左下〕「圖 11・1・1」

「道有」(朱文方印、足利義滿)

注

(1) 遠浦歸帆 北宋後期の宋迪が提唱した「瀟湘八景」のうちの二景。「瀟湘」は、湖南省の洞庭湖とその南にある瀟水および湘水の二河川の流域を指す。ほかに「平沙落雁」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙寺晚鐘」「漁村夕照」がある。

(2) 八軸 卷子装であった「瀟湘八景圖」を一景ごとに切斷し、八幅の軸に改めたこと。室町幕府第三代將軍・足利義滿(一三五八〜一四〇八、後述)が座敷飾りのために手掛けたという。現存するのは七幅で、本圖のほか「漁村夕照圖」(國寶・根津美術館)、「煙寺晚鐘圖」(國寶・畠山記念館)、「平沙落雁圖」(重文・出光美術館)、「江天暮雪圖」(鹿苑寺)、「洞庭秋月圖」(徳川美術館)、「瀟湘夜雨圖」(個人藏)がある。

(3) 牧溪 牧谿(生卒年未詳)。蜀(四川省)の人。法諱は法常。同郷の無準師範の法嗣で、西湖の六通寺の開山となった。畫は殷濟川に學んだ。

(4) 慈照院義政公 室町幕府第八代將軍・足利義政(一四三六〜一四九〇、在職一四四九〜一四七三)のこと。戒名は「慈照院喜山道慶」。京都・東山の地に「東山殿」(後の慈照寺(銀閣))を築き、本圖を含む足利將軍家の唐物のコレクションは「東山御物」と呼ばれた。

(5) 八景 「瀟湘八景」のこと。

(6) 大軸 本圖に加えて、前出の「漁村夕照圖」(國寶・根津美術館)、「煙寺晚鐘圖」(國寶・畠山記念館)、「平沙落雁圖」(重文・出光美術館)の四軸を指す。

(7) 道有 足利義滿(一三五八〜一四〇八)の鑑藏印。室町幕府第三代將軍(在職一三六八〜一三九四)。鹿苑寺(金閣)を建立して、北山文化を生み出した。

備考

本圖は、足利義政の後に、村田珠光、織田信長、荒木村重、徳川家康、松平右衛門太夫、徳川家光、戸田家、田沼意次、松平不昧らのもとにあり、「大名物」として知られた。松平家の後は、個人が所有していたが、文化廳が買い上げた後、平成八年（一九九六）に京都國立博物館に管理換えされた。

著録

『御物御畫目錄』、『天王寺屋會記』宗及他會記、『今井宗久茶湯日記拔書』、『玩貨名物記』、『南都土門本名物集』、『大崎道具之記』、『雲州松平家御藏帳』、田島志一編『東洋美術大觀』九（審美書院、一九一〇年）、相見香雨・秋山光夫・田中一松編『宋元名畫集』下（聚樂社、一九三六年）、金原省吾『牧溪』（東洋美術文庫三）（アトリエ社、一九三九年）

参考文献

一 傳牧溪筆遠浦歸帆圖（『國華』二九一、一九一四年）
高木文『牧谿玉潤名物瀟湘八景繪の傳來と考察』（好日書院、一九三五年）
一 傳牧溪筆遠浦歸帆圖 松平直國氏藏（『美術研究』一一六、一九四一年）
相見香雨「牧谿と八景 上・下」（『日本の茶道』七（八、九）、一九四一年）『相見香雨集三』（日本書誌學大系四十五（三）、青裳社、一九九二年）に再録）
磯野風船子「牧谿の瀟湘八景」（『茶道雜誌』二十五（七）、一九六一年）
東京國立博物館編『宋元の繪畫』（便利堂、一九六二年）

『瀟湘八景畫集』（根津美術館、一九六二年）

鈴木敬「瀟湘八景圖と牧谿・玉潤」（『古美術』二、一九六三年）

田中一松・米澤嘉圃・川上涇編『東洋美術一 繪畫一』（朝日新聞社、一九六七年）

米澤嘉圃・中田勇次郎編『原色日本の美術二十九 請來繪畫』（小學館、一九七一年）

戸田禎佑・川上涇編『日本繪畫館 渡來繪畫』（講談社、一九七一年）

戸田禎佑「水墨美術體系三 牧谿・玉潤」（講談社、一九七三年）

『宋元の美術』（中國美術展シリーズ四）（大阪市立美術館、一九七八年）

大阪市立美術館編『宋元の美術』（平凡社、一九八〇年）

金澤弘「瀟湘八景圖の諸相」（『茶道聚錦九 書と繪畫』小學館、一九八四年）

塚原晃「牧溪・玉潤瀟湘八景圖 その傳來の系譜」（『早稻田大學大學院文學研究科紀要別冊』十七 文學・藝術編、一九九一年）

池田壽子「牧谿筆瀟湘八景圖と西湖」（『デアルテ』九、一九九三年）

『牧谿 憧憬の水墨畫』（五島美術館、一九九六年）

小川裕充「牧谿筆瀟湘八景圖卷の原狀について」（『美術史論叢』十三、一九九七年）

嶋田英誠・中野富士雄編『世界美術大全集 東洋編六 南宋・金』（小學館、二〇〇〇年）

『南宋繪畫 才情雅致の世界』（根津美術館、二〇〇四年）

『筆墨精神 中國書畫の世界 特別展覽會 上野コレクション寄贈五

〇周年記念』（京都國立博物館、朝日新聞社、二〇一一年）

『東山御物の美 足利將軍家の至寶』（公益財團法人 三井文庫 三

井美術館、二〇一四年）〔吳孟晉〕

『關西九館所藏 中國書畫錄』 正誤表

八 江山樓閣圖 燕文貴筆 一三七頁上段四行目

誤 □州關觀察使印

正 秀州管内觀察使印

〔謝辭〕本訂正にあたっては王耀庭氏の御教示を得ました。
ここに記して感謝の意を表します。

『關西九館所藏 中國書畫錄』 正誤表

四 論語集註草稿 朱熹筆

四十二頁上段

誤 4・8 下冊 柯劭忞外題簽

正 4・8 下冊 謝鳳孫外題簽

四十二頁上段

誤 4・9 下冊 柯劭忞外題簽

正 4・9 下冊 謝鳳孫外題簽

五十二頁下段

誤 4・30 下冊 柯劭忞跋

正 4・30 下冊 謝鳳孫跋

一一四頁上段七行目

誤 「鳳孫」(朱文方印、柯劭忞)

正 「鳳孫」(朱文方印、謝鳳孫)

一一五頁下段七行目

誤 柯劭忞跋

正 謝鳳孫跋

(差し替え)

一一八頁上段

注(24) 鳳孫 謝鳳孫のこと。字は石欽、または

石卿、號は復園。漢川(湖北省)の人。光緒二十八

年(一九〇二)の舉人。沈曾植に師事し、書にすぐ

れた。

一二〇頁上段

注(64) 謝鳳孫 注(24)参照。

(追加)

一一五頁下段最終行

「慈護」の注 沈曾植の嗣子の名である。

〔謝辭〕本訂正にあたっては筑波大學教授・菅野智明氏の御教示を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

※なお、本PDF版では圖版頁以外の訂正・差し替え・追加を反映させています。それに伴い、追加した一一五頁下段最終行「慈護」に對する注番號を(75)とし、以下一一六頁までの注番號を一つずつ増やし、對應する一二〇～一二一頁の注番號も變更してあります。二〇一五年三月二十五日發行の印刷・製本版とは異なりますので御注意ください。

擔當者一覽

執筆

弓野隆之
(大阪市立美術館)

竹浪遠
(黒川古文化研究所)

伊藤みのり
(澄懷堂美術館)

瀨川敬也
(觀峰館)

吳孟晉
(京都國立博物館)

實方葉子
(泉屋博古館)

植松瑞希
(大和文華館)

編集

西尾歩
(立命館大學等非常勤講師)

關西九館所藏 中國書畫錄 (PDF版)

二〇一五年三月二十五日發行

編集・發行 關西中國書畫コレクション研究會

事務局所在地 公益財團法人 黒川古文化研究所

〒六六二 〇〇八一

兵庫縣西宮市苦樂園三番町一四 五〇

助成 公益財團法人 三菱財團

關西中國書畫コレクション研究會公式サイト

<http://www.kansai-chinese-art.net>

二〇一六年三月三十一日公開PDF版